生命倫理研究者に
《死と脳の作用について》
伝えた記録

播磨　澪

目次

はじめに 1
第一部 3
スペインの安楽死容認の後押しをした映画『海を飛ぶ夢』を観て 4
Ｒｅ: スペインの安楽死容認の後押しをした映画『海を飛ぶ夢』を観て 6
スペインの安楽死容認の後押しをした映画『海を飛ぶ夢』の原作を読んで . . . 7
キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間と死後の生』を読んで 9
一二月二九日の読売新聞の『脳死判定　ＣＴ導入』の記事に関して 13
新年あいさつ 15
立命館大学立岩真也先生のことと尊厳死問題もろもろ 16
〈積極的臨死介助〉と言う表現に驚いた話 18
大久保愉一被告判決と《死》は二段階で考察されるべきと言う話 19
安藤先生ピアノリサイタルのお礼とＴＢＳ報道特集の話 21
スイスが認めている医師幇助による自殺を《安楽死》と認識する事は間違い . 23
ＴＢＳの放送を観て危機感を募らせているという報告 25
フジテレビ系列で放送される『ザ・ノンフィクション』の案内 26
フジテレビ系列で放送された『ザ・ノンフィクション』の感想 27
ＴＢＳの二か月前の『安楽死の特集番組』の案内とスイスのライフサークルについて 29
アメバプライムのユーチュブの話 31
『私の夢はスイスで安楽死』（ 彩図社 ）とその著者くらんけさんの話 32
〈くらんけさん〉と《安楽死》. 34
〈ネットニュース「俺は生きている」脳死と判定された三六歳米男性、臓器摘出直前に目を開ける〉の案内 36
第二部 38
日本尊厳死協会理事長様 39
Ｅテレ１００ｄｅ名著『ローティ“偶然性、アイロニー、連帯“』（ ２／５ ）指南役様 43
ＮＨＫ『クローズアップ現代』（ ２／６ ）のゲスト様 45
京都哲学研究所共同代表理事様 48
おわりに 54
参考資料・文献 56
著者・著書 57

はじめに

私は、二〇二四年の二月に『生命倫理研究者に死に逝く意識を伝えた記録』（ デザインエッグ社 ）を上梓しました。これは生命倫理および死生学・宗教学を専門とされている鳥取大学医学部准教授の安藤泰至先生に、私の※《死に際体験》をベースにして《安楽死》に関して考えた五年分（ 二〇一八年一〇月～二〇二三年一〇月 ）のメールをまとめたものです。

その後も先生とのメール交換は続いていまして、二〇二三年の一一月以降は、〈死ぬときの脳内の動き〉を主にお伝えしていました。私は、体験や様々な記録から、死ぬ間際は「天国にいける」と思わせる物質が脳内に分泌され至福感に満たされるのではないのかと推察しています。天国の有無は永久に分かりません。しかし、《死》を考えるとき〈死と脳の作用〉を抜きに語ってはいけないのだろうと、《死に際体験》をした者として思います。死ぬ間際に至福感を味わうなら「安楽死は推奨されるべき」と思われるかもしれませんが、私は故意に命を断ったたり脳内に薬剤が働くようにしてしまうと「天国にいける」と言う至福感は味わえないのではと危惧しています。そこを説明するのがとても難しかったのですが、ご理解頂けるようにと先生に書き、そのメールを第一部に収めました。第二部は、『日本尊厳死協会』や哲学の先生や医療におけるＡＩ専門の先生に、思いが溢れてお送りした手紙やメールです。一方的にお出しした物ですが、私が死と終末期医療に関して何を危惧しているのかが分かって頂けるのではと収めました。

《脳死・尊厳死・安楽死》という新しい死を考えるとき、従来の宗教や哲学では答えが出ないのだろうと感じています。新しい死を考える上で、一番示唆を与えてくれるのがソクラテスの遺した言葉です。そしてソクラテスの死を実況中継したプラトンの『パイドン』は、死に関して信頼のおける実録です。最後まで読んで頂くとこう語る意味をご理解頂けると思います。最後までお読み下さると幸いです。

二〇二四年一二月吉日

※私の死に際体験

１、一四歳、大学病院でがん告知を受ける（ 手術後は誤診で別の病気と分かる ）
２、一六歳、交通事故に遭い国道を二一メートル飛ばされ、一週間意識不明になる
３、二八歳、妊娠三か月のとき、出血性大腸炎になり母子とも命が危険と言われる
４、三二歳、海水浴中に沖に流される
５、四八歳、食物アレルギーでアナフィラキシー・ショックを起こし気管支が塞がり脳死寸前になる

第一部

安藤先生へのメールと日記

スペインの安楽死容認の後押しをした映画『海を飛ぶ夢』を観て

二〇二三年

一一月二日

安藤先生
おはようございます。
　一一月となりましたが、日本の半分が夏のようで、こちらも暖かな日になっております。どうしても気になってスペインの安楽死容認を後押しした映画※『海を飛ぶ夢』のＤＶＤを注文していました。昨日着きましたので午後から観ました。死に際を体験した者には衝撃的な内容でした。

映画『海を飛ぶ夢』を観て
　映画を観て、実在した人物を追った作品と分かりました。そして最後まで観て主人公が何故「安楽死を求めたか」の意味が分かる気がしました。
　主人公は若いころ岩壁から海にダイブして首の骨を折ってしまい首から下がマヒしています。その首を折った瞬間に〈死に際〉を体験しています。その時の様子が、マヒした原因を弁護士に話すときに回想として語られますが、ダイブして首を打った瞬間に意識を失っていたのではなく、走馬灯のような画像が頭を駆け巡りそのあと《甘美なる死》（ 原語ではなんと表現していたのか分かりませんがこう訳されていました ）を味わっていたと語っています。その《甘美なる死》を味わっていた矢先に主人公は友人に助けられます。多分、実在した彼は、死ぬ寸前によぎると言われている走馬灯を観て、死ぬ寸前で出ると推察されているセロトニン等の化学物質が脳内に分泌され幸福感の中で自分の死をすんなり受け入れると言う経験をしていたのだと思います。自分の死を安らかに受け入れるという体験をしてしまった彼は、どんな死に方をしてもそのように死ねると思っていたのだろうと映画を最後まで観て思いまた。だから、彼は「死ぬ権利」を主張するのに躊躇が無かったのだと思いました。彼は一度味わってしまった《甘美なる死》に突き進んでしまったのです。

映画ですから《安楽死》で青酸カリを飲んだときに苦しむ姿は描かれず、彼は青酸カリを飲んで満足そうな顔をして「これでいい」「もうすぐだ」と言って死んで逝くのです。多分実際の彼も毒が回るまでは嬉しかったのだと思います。彼のその喜びの表情は、これから首を折った時に味わったあの《甘美なる死》が訪れると思っている表情なのだと思いました。それを映画では首を折った瞬間の映像とだぶらせていました。彼を応援した人たちも彼は望んだ《甘美なる死》を味わって逝ったと思っていたことでしょう。しかし、私の推察からすると彼は後悔の渦で中で息絶えたのだと思います。

彼が青酸カリを飲んで故意に死んでしまったら、事故で味わったような死に方にはならないと知っていたら、彼は充分に生きようとしたはずですし、家族や友人に恵まれていた自分の生を肯定したはずと思うのです。世論は不自由な身体でこんなに死にたがっている人に《安楽死》を認めないのは酷だと思って《安楽死》を容認しようとなったのかもしれませんが、死に際を体験した者としてはあまりに切なすぎる結末でした。

私も分かりますが、交通事故で一六歳で死んでいたとしても悔いはないというあの感覚はとても不思議なものです。主人公がときどきあのとき死んでいれば良かったという気持ちもよく分かりました。普通の人があの時こうしておけば良かったという感覚とは違うのです。あのとき死んでいてもなんの悔いも無かったという不思議な至福感なのです。主人公は肉体が思うようにならない哀しさはあったと思いますが、故意に命を断ったら《甘美なる死》は訪れないと知っていたら彼は絶対に青酸カリは飲まなかったし、あんなに「死の権利」を主張しなかったと思いました。

彼の死への思いが哀しく、その結末があまりにも切なくて言葉を失いました。この映画でスペインが《安楽死》容認を可決したのかと思うと気持ちの整理がつかなくなってしまいました。

映画の中で身体が不自由な牧師が彼に「命は全うしなければいけない」と諭しに来ます。国家の立場として裁判所は「安楽死は殺人だ」と述べます。しかし、《甘美なる死》を体験した彼は「死ぬ権利がある」という主張を曲げません。「命を全うしたら天国にいける（と思って死ねる）」という宗教の教えは間違っていないのですが《神の御教え》だからという理由では彼は納得できなかったのです。また「自殺したら地獄に堕ちる」という宗教の言い伝えも彼には通用しなかったのです。それは彼の人生が地獄だったからという理屈に負けてしまうからでした。黒歴史のある腐敗に満ちた現代の宗教家が諭す教えは彼の前では虚しい響きでしかありませんでした。時代は神の御教えでは納得できないところまで進んでしまっているのだろうと思いました。宗教の力が弱くなり個人の尊厳が尊重されなければいけない今の時代では「安楽死は殺人ではない」と法律を変えざるを得なくなります。時代がここまで進んだのだと思いました。

この流れを止めるには、《安楽死・自殺》に《甘美なる死》は訪れないという科学的解明と体験者の証言を根気よく集めて訴えて行くしかないのだろうと思いました。

Ｒｅ: スペインの安楽死容認の後押しをした映画『海を飛ぶ夢』を観て

一一月二日

播磨さま（ 安藤先生に掲載の許可を頂いています ）
こんばんは。
映画『海を飛ぶ夢』のご感想、ありがとうございます。この映画はずいぶん前に観て、青酸カリでなんで《安楽死》ということ以外にもいろいろ違和感を感じたのですが、その大きな部分が、播磨さんの感想を読んでよくわかった気がします。首の骨を折った瞬間に得たとされる《甘美な死》のイメージを《安楽死》と重ね合わせることで、その間の「苦しい生」をある種の拷問として、無意味なものとして描く、という構図なのですよね。

※『海を飛ぶ夢』（ 原題はスペイン語で「内なる海」の意味 ）
　一九四三年スペイン生まれのラモン・サンペドロ・カメランの手記。アレンハンドロ・アメナーバルが監督して二〇〇四年に映画化された。ラモン・サンペドロ・カメランは二五歳のとき断崖から海に飛び下り、引き潮だったために海底に頭部を強打し、第七頸椎骨折をして四肢麻痺になる。以来三〇年にわたり死が自由をもたらしてくれると願い安楽死を求める。彼がスペインで初めて法廷で安楽死を求めた。彼の訴えは却下され、一九九八年に彼は支援者の助けを借り青酸カリで自ら命を終わらせた。彼の手記がその後映画化され、安楽死合法化の民意を高める作品となり、ペドロ・サンチェス政権下で二〇二一年三月一八日に安楽死と自殺幇助を合法化するに至った。スペインは欧州で四番目に安楽死と自殺幇助を合法化した国となった。
（ ウィキペディアと『海を飛ぶ夢』（ 翔年社 ）の原作本を参考に筆者がまとめたもの ）

スペインの安楽死容認の後押しをした映画『海を飛ぶ夢』の原作を読んで

一一月一七日

安藤先生
こんにちは。
　先日頂いた資料に『安楽死できる国で起きている事』の訳本が刊行予定とありましたので、その題名で検索しましたら、児玉真美さんの『安楽死が合法の国で起きている事』（ 筑摩書房 ）が出版されると知りました。それで、今回は図書館に買って欲しい本としてリクエストしました。近所の図書館は新刊をリクエストすると買ってくれますので図書館においてもらった方が良いと思いました。
　スペインの安楽死法案のきっかけになったという『海を飛ぶ夢』の原作をどうしても読まなくては思い、取り寄せました。海底で首を痛めた寸前に走馬灯を見て《甘美な死》を味わっていたという映画の描写が事実だったのかを確かめたかったのです。
　昨日届いたのですが、彼は岩壁から海底に着く三〇秒間は冷静に記憶していました。死に瀕するときの脳内は冷静という私の体験と同じでした。彼は落下しながら、周りを冷静に見つめ同時に「自分は窒息するだろう」と冷静に判断しているのですが、それと並行するようにこれまでの体験の走馬灯を見ていたようです。死に瀕した時の脳内は冷静で、かつ重層的に思考ができ目も肌感覚もと五感も敏感に状況を感知していて、私がアナフィラキシー・ショックで窒息して死に瀕していくときの三〇秒間と殆ど同じでした。瀕死の脳の作用は似ていると分かりました。私に走馬灯は起きていませんでしたが彼は走馬灯を見ていたようで、死に瀕したとき走馬灯が起こると言うのは事実のようです。ただこのとき彼は自殺を試みていませんし落下しているときは肉体が脅かされていませんから《恐怖》は感じていないのです。
　原作を読むと、実際の彼は映画のように《甘美な死》（ 脳内でのセロトニン等の分泌 ）は味わっていたのではなく意識がハッキリしている中、窒息死の寸前で助けられたようです。ただ、彼は、死後の世界を《命のユートピア》として《痛みから解放され、死によって喜びを手に入れる道・自由になる道》と位置付けています。ですから、あのとき助けてもらわなければ「ユートピアに行けたのに」という思いをずーッと引きずっていたようです。彼は「自分は信者ではない」と思っていても、死後の世界は天国であるという、カトリック教徒の死生観でした。生存することは「地獄を生きる道」と思っているので「ユートピアに行きたい」という思いだけが強かったようです。反骨精神旺盛で国

家や宗教への反発が激しいのですが、それらは、「自分の死にたいという自由意思を邪魔する圧力」と言う認識が強く、どんな言葉も彼には届かず、結局、彼は自殺願望者だったのだと思いました。

四肢がマヒしていて自分では死ねないという事もありますが、カトリック教の国での自殺は地獄行きという重しが心を強く支配していたのだと思います。彼は地獄には行きたくなかったのです。キリスト教圏の自殺願望者にとって《安楽死》の道を開くと言うのは「ユートピアにいける唯一の道なのかな」と彼の主張を読み思いました。

気になったのが《理性》という言葉の連発でした。「理性的であることを是とする社会・自立を是とする社会・効率を是とする社会」から自分がこぼれ落ちているという思いが彼を苦しめていたのだと感じ、自殺願望を曲げない人の心は難しいなぁと思いました。

私の主張内容の弱点は死ぬ寸前の状況を理解してもらいにくいという点で、特に臨死体験に対しては眉唾的な扱いになります。私は確かな臨死体験はしていないのですが、穏やかに自分の死を受け入れるというあの感覚は臨死体験の変形、もしくは入り口だったのではないのかと思うのです。

昨夜、以前予備校の先生が話されていた「エリザベス・キュープラ・ロスは、『死ぬ瞬間』（ 中公文庫 ）を書いた後にスピリチャルな方向になって、彼女は気が狂ったと評されていた」という言葉を思い出しまして、彼女が臨死体験を記録していたのではないかと思いつきました。『死ぬ瞬間と死後の生』（ 中公文庫 ）を取り寄せて読み直してみようと思っています。事実として彼女が書き残していたら、実際の《死に逝く意識》やその先で脳内に起こることが理解されやすくなるのではと思っております。

キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間と死後の生』を読んで

一一月二三日

安藤先生

お忙しい中、わざわざメールありがとうございます。あれからキューブラー・ロスの『死ぬ瞬間と死後の生』も読みました。死を体験していない人には眉唾なのですが、死を体験した者にとって臨死体験と言うのは考えなくてはいけない問題になります。体験した者としての懸念をまとめました。

『「死ぬ瞬間」と死後の世界の生』で記されている「臨死体験と死後の生」について

キューブラー・ロスは一九二六年生まれで、去年（二〇二二年）九六歳で崩御されたエリザベス女王と同じ歳でしたので、彼女が生きた時代が分かりました。彼女は二〇〇四年に死去していますが、彼女は彼女の理論で安楽死は一五〇%反対を表明しています。

彼女は自分や他の人の数々の臨死体験の話を経て「死とは繭と言う肉体から抜け出し魂という蝶になって行くとき」と位置付けています。その結論に至ったのは、体外離脱や臨死体験からで、『「死ぬ瞬間」と死後の生』の本の半ばに臨死体験の話があります。彼女は体外離脱も臨死体験としています。臨死体験を神秘体験として具体的には描写していませんが、体外離脱の気持ちの良い感覚や心地よい空間の体験を臨死体験と指しているようです。その体験の延長に死後の生があると考えています。

臨死体験は、いわゆる死に瀕して生還した人が語る体験のことで体外離脱をしたり天国を思わせる空間を味わったりとても幸せな気分に浸るというもので、年齢や民族を問わず世界中から報告があったと記述されています。彼女は臨死体験から霊的世界やキリスト教的な彼女なりの死生観に繋げて、それを踏まえて彼女は「死後の世界がある」と確信し「人は死ぬのではなく肉体から魂が離れる」と唱えています。基本はキリスト教の考え方で、日本人のカソリックのシスター・鈴木秀子さんが、臨死体験をして死んだら天国にいけると確信して生きている人を励ます活動をしていると言うのに通じる気がします。

これは、たぶん脳に体外離脱する能力が備わっているのと、脳は死ぬ間際に通常より何十倍ものセロトニン等の脳内ホルモンを分泌するという作用があるからで、それが人々が語る臨死体験なのだろうと推察します。二〇一四年放送のＮＨＫスペシャル『臨死体験　立花隆思索ドキュメント　死ぬとき心はどうなるのか』では、すでに体外離脱を起

こす脳の部分（角回）は分かっていると説明されていましたし、死に際の脳内には通常の三〇倍のセロトニン等の化学物質で溢れているという報告もされていました。ソクラテスが《ひょっとすると、それ（死）はまた、人間にとって、いっさいの善いもののうちの最大のものかもしれないのです（二九ａ-ｂ）》と言っているは、この時代にも語られていた臨死体験を指すのではと推察します。

私ははっきりした臨死体験はしていないのですが、交通事故に遭って意識不明だったときに、穏やかに自分の死を受け入れる感覚を味わったことは覚えています。それは、例えば信じる神様がいる人ならその神様に会えると確信が持てる感覚で、死んだら大好きなおばあちゃんに会えると思っている人は大好きなおばあちゃんに会えると確信する感覚で、死んで無になると思っている人は無に成れると思う感覚で、天国にいけると信じている人は天国に向かっているあるいは着いたと思わせる感覚です。これは多分生物は死ぬときの脳内の現象で本当に満ち足りて死んで逝くようになっているのだと思うのです。私が安楽死で危惧する一つが、薬剤投与で故意に脳内を人工的に操作してしまって最後にこの現象が阻害されないのかということです。立花隆さんの臨死体験を追った番組では、麻薬と似た現象だけれど、臨死体験は麻薬のときと違い映像や内容がくっきりしていると報告されていました。

《命》と言うのは生きるための戦略を備えて生まれてきます。肉体全てが「生きようと」能動的に稼働しています。また、《恐怖》という感性を持っていることで死を回避するようなっています。すべて「生きるように設計されて死を回避するように生まれ落ちてくる」のです。しかし、それだけの装備や戦略をもち《恐怖》という「死」を回避する感性まで持っているのに、《命》は肉体が生きる機能を失った時点で死ぬ宿命にあります。ですから、《命》の使命は《命》を生き切るという事なのだと思うのです。そして、生き切ったら最後に体外離脱する感覚が起こったり、幸福感に満ち溢れたりするように脳は造られているのだと思うのです。肉体が生きられなくなった時点で、この臨死体験や穏やかに自分の死を受け入れるという現象が多分誰にでも起こるのだと思うのです。私のように突然の交通事故に遭っても起こるのです。今までは誰もがこの現象を味わって死んで逝けたと思うのです。それは、故意に命を操作するという事を人類はしてこなかったからです。

今、《安楽死》や末期がん患者の鎮静のように命の操作が求められていますが、それは果たして良いことなのかと思ってしまうのです。命を故意に操作したら脳内が正常に働くのだろうかと懸念します。キューブラー・ロスは「臨死体験は拾おうと思うと世界中に沢山ある」と言っていますから、人間の脳は最期に幸福感に包まれるというのは確かなのだと推察しています。だからこそ、最後に命を操作して良いのかという懸念が強くあります。

何故「死は怖くない、死は自由に羽ばたける蝶になる瞬間」と言えるのか

ソクラテスは「死はいっさいの善いもののうちの最大のものかもしれない」と言い、キューブラー・ロスも「死は怖くない、死は自由に羽ばたける蝶になる瞬間」と言いますが、生きる力のある肉体において「死は怖いもの」で「回避されるべきもの」です。そ

れがどうなったら「死はいっさいの善いもののうちの最大のもの」「死は自由に羽ばたける蝶になる」と言えるのか、その紐解きが無いと《命も死も》何なのか分からないのです。それが分からないと、現実が苦しいと、「死後の世界は素晴らしいところ」や「死は怖くなくて蝶になって自由になれる」という言葉に縋って自分の命を断ってその世界に行きたくなりますし、現世で痛い思いをするなら一気にそっちの世界に行きたいと《安楽死》を希望したくなります。もちろんキューブラー・ロスは自殺も安楽死も賛成できないとして「運命をまっとうしたとき、この形で「源」あるいは「神」と合体するのです」と言っていますが、その言葉は響いてこないのです。

《命》と言うのは「生きるため」に設計されています。だから死ぬ寸前まで「生きること」を諦めません。《命》に生きる力がある限り「死は恐怖」です。それが《命》としての正しい反応です。《命》（ 肉体 ）が「生きる力」を失って初めて「死は怖くなくなる」のです。

病気は分かりやすいです、徐々に徐々に弱っていきますから「生きることを諦めない命」も弱り「死が怖いと思う」エネルギーも出せなくなったら「死は怖くなくなる」のです。事故のように（ 高所からの落下・交通事故やその他の事故 ）一気に死に向かうときは脳内の活動が全開して冷静に自分の状況を理解していきます。事故のような偶発で肉体が脅かされていないとき《恐怖》は感じず命は全身全霊で「生きよう」と稼働します。最期まで生きることを諦めないのですが、肉体が駄目になったら「死をすんなり受け入れる」形になりこのときに「死は怖くなくなる」のです。アナフィラキシー・ショックのように窒息させられる（ 首を絞められる ）のような肉体が脅かされるときも脳は全開して状況を冷静に判断していきます。同時に様々なことが考えられこれからすべきことまで考えられるのですが、息ができないという形で肉体が脅かされていますから生命としての根源的《恐怖》も味わっています。この時間は永遠と思うくらいに長いですが、肉体が生存できなくなったら、多分「すんなり自分の死を受け入れる」「肉体から魂が離れる感覚」が起こってくるのだろうと思います。がん告知された末期がんの患者さんたちは辛い期間が一番長いのだろうと推察します。生きる力が残っているうちから「自分は死ぬ」と宣告されるので死への《恐怖》を味わい続けなければなりません。これは《命》が持つ《根源的恐怖》ですから、理性で蓋をしても逃れることが出来ません。《命》は死ぬ間際まで生きようと稼働しますから、肉体に生きる力が失われるまで《恐怖》から逃れることが出来ません。しかし、肉体が生きられなくなり命を閉じる死ぬ間際に、脳内にセレトニン等の脳内ホルモンの放出が起こるのだと経験的に思います。このとき死は怖くなくなり至福感に満たされるのだと推察します。脳にはこの最後のプログラムがあるのではないのかと思うのです。

キューブラー・ロスも言っていますが「命を諦めずに全うして初めて最後の脳内のプログラムが開くようになっている」のだと思います。生きる力が残っているうちに、故意に命を断ったら恐怖が全身に襲ってくるはずなのです。そのときに最後のプログラムが開くのか、もし開いたとしても恐怖が渦巻いていたら放出される物質が違ったりしないかとても心配です。また、脳内を薬剤で人為的に操作して命を終わらせてしまったら、それらの現象が阻害されたり感知できなかったりしないのか疑問も残ります。

《命》は生きる力がある限り諦めてはいけないもので、命を全うすることが《命》を

宿してきた者の使命であろうと思うのです。

一二月二九日の読売新聞の『脳死判定　ＣＴ導入』の記事に関して

一二月三一日

安藤先生
こんにちは。
　大晦日となりました。毎日本当にお忙しいことと存じます。お身体の方はその後お元気でいらっしゃいますでしょうか。
　さて、児玉真美さんの『安楽死が合法の国で起きている事』の本を図書館に購入してもらい一一月に拝読致しました。児玉さんの緊迫感が伝わる本でした。しかし、児玉さんご自身の思いが強く、内容があまりに濃すぎて分かりにくかったのが残念に思いました。私は普通の方より《安楽死》に関して知識がある方ですが、安楽死合法の国で起こった事例を詰め込み過ぎて何が問題なのかが一回読んだだけでは分かりにくかったのです。児玉さんの本を読んで分り易く説明し直すと良いのかなと思い、もう一度読んで私なりにまとめられたら良いなと思っております。
　一二月二九日の読売新聞で『脳死判定　ＣＴ導入へ　検査不能の時血流状況確認』の記事が出ていました。瞳孔の検査ができない脳死患者の脳に血流が流れていないことを確かめるためだそうで、来年一月（ 明日 ）から実施されるそうです。どういう結果になるのだろうという疑問が湧きました。心臓が動いているわけですから、脳にダメージを受けてもダメージを受けていない箇所には血流は流れていると想像してしまいます。血流が少しでも流れていたら脳死判定はどうなるのでしょう。
　ＣＴ検査で脳に血流がすっかり止まっている状態がハッキリすると家族や社会も納得しやすいように思うのですが、脳の血流が止まってもドイツのベルリンシャリテー大学病院の脳科学者らによる研究では、「心臓が止まって脳のへの血流が止まってからも三分から五分間は脳細胞が活動を続けている」そうで、心臓が動いていたらダメージ以外や脳の深部では血流がある様に思います。そうすると本人には意識化されているのではと思ってしまいます。また、豪州ディーキン大学の神経学者のキャメロン・ショー博士が死亡した女性の脳の解剖をしたら、脳の基底核は最期まで抵抗するという結果だったそうで、ＣＴが脳の基底核までの血流が測れるのかという疑問も残ります。脳が死んでいるという判定がＣＴだけで分かるとされて良いのかとも思ってしまいます。今後、脳死判定者でＣＴ検査を実施した場合の結果を正しく知らせて欲しいと記事を読んで思いました。

年末になり気になりました事をまとめさせていただきました。では、来年もお身体にお気をつけてご活躍ください。どうぞ、良いお年をお迎えくださいませ。

新年あいさつ

二〇二四年

一月七日

安藤先生
明けましておめでとうございます。
　大晦日にメールを頂きながら返信が遅れました。コロナが「５類」となり、子供たち一家との新年会の後、三日から小学生の孫二人を預かりまして、昨日帰りました。やっと平常運転になっております。
　コロナが「５類」となり皆さんが久々の里帰りをしていた元日に、能登半島で震度七の地震があり本当にビックリ致しました。あのときは揺れる前にこちらでもスマホの緊急地震速報が鳴り、その数十秒後に横揺れが起こりました。また、二日の夕方の羽田空港での日航機と海上保安機の事故も本当に驚きました。二〇二四年は、記録に残る大災害が起こり、心痛む幕開けでございますね。
　今、《命》に関しての大きな分岐点に居るのだと日々感じております。また、いろいろ勉強して参りたいと思っておりますので、今年もどうぞよろしくお願いいたします。

立命館大学立岩真也先生のことと尊厳死問題もろもろ

一月二九日

安藤先生
こんにちは。
　お疲れの中、メールを頂きましてありがとうございます。《立岩真也を偲ぶ会》があったという事で、ネット検索しましたら式典の模様がネット配信されていまして今朝、視聴致しました。立岩真也先生の功績、お人柄、また立岩真也先生がご尽力された『生存学』が多くの次世代の方々に受け継がれているようで、その力強さを知ることが出来ました。立岩先生の遺されたものは大きいと思いました。また立命館を拠点とした『生存学』を学び活動されておられる方々の熱量の高さにも驚きました。ただ、それなのに普通の生活者の私のような立場の者にその発信が届いてこないという現実をふと感じました。巷では、京都ＡＬＳ嘱託殺人事件の主犯の大久保の量刑が軽くなるようにというネット書き込みがあって、《安楽死》を認めて欲しいという声は依然多いのです。
　先生のご指摘のように《尊厳死》が終末期ではない人にも行われ始めているという現実に誰も気付けない状況です。こんなに〈安楽死問題〉に関心がある私でさえ、公立福生病院人工透析中止が発覚して初めて、終末期ではない人工透析の患者さんが命の選択を迫られていたことを知りました。いつの間にか人工呼吸器も本人のリビングウィルが無くても家族の承諾で外せるようになっていて、殆どの人はその事実を知りません。先生のおっしゃる様に誰もが知らないうちに《尊厳死》として終末期ではない命が奪われているという現実はとても恐ろしいと思いました。
　推進派のお医者さんは「死なせること」「苦しまずに死なせること」が最善という思いでいらっしゃるのだなぁとお手紙を拝読すると分かります。現場のお医者さんたちの多くは、長引かず死なせたいという思いが強くそれが患者さんのためと信じていますから、暗黙の了解として死なせる方向に緩やかに流れてしまうと言うのが医療現場の現実ではないのかと思います。
　テレビのタレントさんの誰かが「死んだと思われている自分に意識があってそれを外部に知らせることが出来ずに間違って火葬されたらと思うと怖くてたまらない」と言っていたことがあります。間違って火葬されることは無いと思うのですが、意識が無いと思われている人に意識があって外界の言葉を聞いていて「では、人工呼吸器を外しますね、これで亡くなりますがよろしいですね」という医師の声と家族の「はい、お願いします」という声を聴いていたらどんなに怖い思いをしながら死なされてしまうのだろう

と推察します。『生存する意識』（ みすず書房 ）を読んだ人はこれが推測できますが、ほとんどの人は読んでいません。

推進派のお医者さんには是非『生存する意識』を読んで頂きたいと手紙を書いていますが、意識不明と思われている患者さんの９３％が生きることを望んでいるとお伝えしたら、７％の人が安楽死を希望しているならその人たちは死なせてあげるべきという反論が来ます。私は、死なせるのではなくカウンセリングやケアをして意思疎通を図れば死にたいという気持ちを変えることができるのでは、その医療こそ必要なのではと反論しております。こうしたお医者さんの声を聴くと、患者さんの苦痛や苦悩を目の当たりにされ、「死なせて欲しい」という言葉に「死なせること」が最大の癒しであり最大の幸せと思ってしまう現実もあるのだろうと思います。推進派のお医者さんの信念も固いと感じます。

取り留めなく書いてしまいました。気が付けば一月も終わります。これからも宜しくお願い致します。

〈積極的臨死介助〉と言う表現に驚いた話

二月一一日

安藤先生
おはようございます。
　色々、私なりに作戦を練るためにネットサーフィンをしていました。ビックリしましたのがネットで中央大学で法律の専門家が〈治療中止とその正当化要件〉〈積極的臨死介助〉〈リビングウィルと自己決定権〉というテーマで研究発表された記録を見つけたことでした。タイムテーブルだけしかなく内容は分からなかったのですが、法律の分野でも《尊厳死・安楽死》は研究されていることや〈積極的臨死介助〉という故意に死なせることを介助として是とする表現に驚きました。これは、死なせる事が治療の一環と誤解させる表現ですよね。シンポジュウムの内容は分かりませんが、この表現があるという事は現実に起きていて、それが法律に抵触しないかどうかを議論するのかなぁと思いました。もし、医療者に「ご家族を積極的臨死介助して楽にしてあげましょうか？」と言われたら家族は「はい、お願いします」と言ってしまいます。
　先生がおっしゃられていたように知らないうちに医療現場に「尊厳死も安楽死も導入されていく」危険がある様に思いました。法律の専門家にはこの表現が持つ危険性をしっかり理解いただきたいとネットをみて思いました。

大久保愉一被告判決と《死》は二段階で考察されるべきと言う話

三月八日

安藤先生
こんばんは。
　三月五日に京都ＡＳＬ嘱託殺人事件の、大久保愉一被告に懲役一八年の判決でましたね。懲役一八年が妥当かどうかは分からないと言うのが正直な感想で、総じて殺人に関して日本の刑は軽いのではと言う思いがあります。有罪判決は正当と思うのですが、ヤフーのコメントを読むと「安楽死は必要」という意見が大半で「苦しみからの解放が死」という事に疑いを持っていない人が殆どで、難病者の苦しみは解放されるべきだから死なせてあげるべきというロジックの正当性を疑っていないのです。ＡＬＳの患者さんを家族に持つ人も「安楽死を認めるべき」と書き込んでいましたが、家族が本人の胸の内を本当に理解しているのかと思いました。「安楽死が安楽な死に方ではないという証明を世間に分るように伝えていかなければいけないのだろうなぁ、しかしどうすると良いのだろう」という無力感にかられます。

　私は、「生きる力があるときに死なせること＝安楽死」に関して、二段階で考えていかなければいけないと思っています。
　一段階目は、生きる力がある限り命は死に抗いますから安楽死をしたら、恐怖と後悔の中で死に至る危険性があるという事です。二段階目は、安楽死した時に必ず生命が死ぬときに味わえるはずの「幸福感をもたらす脳内ホルモンを出せるのか」という懸念です。薬で眠らされたことにより脳は正常な反応をするのかと懸念します。薬で死なせることで、死に逝く人が最後に味わうはずの幸福感が奪われるとしたらそれは許されるのかという思いがあります。二段階の問題は、天国（ 浄土 ）はあるか否かという宗教問題になってしまって、それはスピリチュアルな問題として考えがちです。多くの人が「死」は苦しみから解放される方法と結論付ける根底には天国（ 浄土 ）を微かにでも信じているからだと思います。本当に天国があるなら問題はないのですが、ただそれが〈脳〉の問題だったとしたらどうなるのだろうと思うのです。
　エリザベス・キューブラ・ロスが『死後の生』を語り、日本では救命救急センターで勤務していた矢作直樹氏が『人は死なない』（ バジリコ ）という著作で死後の霊的世界

を確信していますが、この辺の説に関してはスピリチュアルな問題として扱われ、医科学あるいは哲学や生命倫理学の「死の考察」からはみ出るとされていました。私はこの領域は〈脳の機能〉の問題だと予測しています。この〈脳の機能〉の証明ができると決してスピリチュアルな問題ではなく〈死〉の問題として考えなくてはいけないのだと思うのです。

「命は最後に脳内ホルモンを出して幸福感を味わって死ねる」という事が証明されたら、故意に命を操作すると「最後の脳内ホルモンが正しく放出されるのか＝最後に誰もが味わえるはずの天国にいけると思う感覚を味わえるのか」という懸念が生まれます。〈脳の機能の問題〉としてとらえると「安楽死容認」に反論することが出来ます。結局今は眉唾ものとして真摯に耳を傾けてもらえずに終わってしまうのが歯がゆいです。

でも、私は花粉症の実例がありますので医学が発達したら私の体験に追い付いてきてくれるのではないのかと思っております。私の高校時代はもう五五年も前になってしまいましたが、目がかゆくて眼科の先生に言ったら「そんな病気は無い」と言われ目のかゆみを信用してもらえずに終わっていました。ブルーベリーケーキを食べて具合が悪くなったときも「ケーキを食べて具合が悪くなったって？」と怪訝な顔をされて相手にされませんでしたが、軽い食物アレルギーだったのだと思います。どちらも全く相手にしてもらえませんでしたが、医療が発達して花粉症や食物アレルギーが判明されて誰もが認知するようになっています。

ただ、〈脳の機能〉の問題が証明されても科学は人体の現象に追い付かないですし、〈死に際〉の一人称の思いは今後どんなに医学が発達しても永久に分からないのだと思います。この分らないという事に対して、謙虚な姿勢が大事で故意に死の操作をしてはならないという生命倫理が必要なのだろうと思います。

京都ＡＳＬ嘱託殺人事件判決のヤフーコメントを読むと、ため息が出てしまいました。

三月一七日（ 日記 ）

ゲノム問題検討会議で『脳科学研究と人文社会科学の接点領域にある緊張と可能性』の講演会。視聴した。

講師：入来篤史先生（ 国立研究開発法人理化学研究所 未来戦略室上級研究員 ）

安藤先生ピアノリサイタルのお礼とＴＢＳ報道特集の話

三月一八日

安藤先生
こんにちは。
　一昨日はリサイタルご招待ありがとうございました。リサイタルはアッという間で、隣にいらした奥さまと「アッという間におわりましたね」と思わず話してしまいました。あのホールのピアノは、力強い音なのに重くなく重厚なのに軽やかな音に感じまして、先生があのピアノで演奏会をしたかったというお言葉が良く分かりました。
　寄せ書きのカードはお手元に届いたことと思います。花束お菓子不要とありましたので、せめてカードでもと用意して参りました。受付の方が話しやすそうだったら、せっかくなので寄せ書きに使っていただいて、もし話しかけづらかったら私一人でカードをと思っておりました。とても話しかけやすい方でしたので、寄せ書きの提案ができました。初のリサイタル二〇二四年三月一六日の日付を入れ皆様のサインが入ったカードになったようで本当に良かったです。
　済みません、途中で送信になりました。続きです。さて、ご協力頂きました『生命倫理研究者に死に逝く意識を伝えた記録』に関して少しづつお返事をいただいております。上野千鶴子先生、小松美彦先生にもお送りしてご返事いただいております。また、緩和ケアの現役の先生にも少しずつお送りしていますが、緩和チームで共有して読んでくださると言うご返事も頂けております。やはり、現役の緩和ケアの先生方も《安楽死》は今大きなテーマだそうです。頑張って色々な方面にお送りしようと思っております。
　それで、昨日ビックリしたのですがＴＢＳの報道特集で、最近スイスで安楽死を遂げた日本人女性を紹介したニュースがありました。もうご存知かもしれませんがＵＲＬをつけます。
https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/1058666?display=1
上手く開いてくれると良いのですが。彼女はパーキンソン病で、決して終末期ではなく、内容的には自殺願望者でした。そうした患者を医師の自殺幇助で死なせてしまうスイスの機関にも疑問が湧きました。そして、《安楽死》の要件を満たさない難病患者の自殺願望を《安楽死》問題として取り上げる日本の放送局の認識の浅さにも問題があると感じました。これでは「生きづらい人は死んで良いのよ」というメッセージをテレビ局がしてしまっているようです。「苦しい思いをしている難病患者には安楽死を認めましょう」というメッセージが裏にはあって《命》の問題として取り上げてはいないのです。

　ＡＬＳ患者の岡部宏生さんにインタビューする形で「生きたい人は生きて良いけど」という幅を持たせた作り方もちょっと疑問に思いました。《命》に対して〈自己決定〉できるという前提がそもそもおかしいのだと思うのですが、「死にたい人は死んで良いのですよ」という善人ぶった残酷さを感じました。
〈人生〉は〈自己決定〉の対象ですが、《命》に〈自己決定〉はおかしいです。〈人生〉と《命》が混同されているように思いました。済みません。途中で行ってしまったので慌てて書きました。

スイスが認めている医師幇助による自殺を《安楽死》と認識する事は間違い

三月二〇日

安藤先生
こんばんは。
　実は、今、ＴＢＳに抗議の手紙を書いていました。《安楽死》の要件を満たさない患者さんのスイスでの医師幇助自殺を《安楽死》として扱ったことに抗議しようと思います。今後《安楽死》を特集するなら《安楽死》が認められる要件を視聴者にも分かるように正しく報道しないと報道機関としてダメだと思いました。また、医師幇助による自殺を《安楽死》と認識して考えてしまうのは危険で、それを《安楽死》と報道してはダメだと思いました。小島ミナさんもそうでしたが、〈安楽死の要件〉を満たしていないのに《安楽死》として報道されて、生きる希望を失っていなかった京都ＡＬＳ患者の林さんが視聴して《安楽死》を熱望するようになった経緯があります。あの放送を観て今後パーキンソン病の人たちの〈安楽死希望〉の声が高まって来るのではないのかと心配になります。それについても抗議しようと考えております。
　以前、哲学カフェでの自殺願望の男性は、止めて欲しいのに止めると反発が止まらなくなっていました。自殺願望の方の対応は難しいですね…（ 涙 ）。ＴＢＳの安易な『安楽死特集』はそうした人たちを刺激してしまったと思います。岡部さんのインタビューを入れたことで「生きたい人の権利は守りましょう」そして「死にたい人は死なせてあげましょう」という構成になってしまったと思います。意図的でないにせよそういう放送になっていたと感じました。私は、自殺願望者に〈死に逝く脳内〉をお知らせすると少しは〈死の現実〉が分かるのではないのかと思っております。
　先生のリサイタルの翌日一七日に〈ゲノム問題検討会議〉で脳科学の先生の講演がありまして、これからの技術である、ＡＩや機械と脳を連結させるＢＭＩと倫理道徳についてがテーマでした。講演下さった理化学研究所の脳科学の先生に私の体験をメールでお伝えしましたら内観経験は貴重な研究材料と言って下さいました。脳の問題として《安楽死》を考えていけると説得力が出ると思います。その先生がこの問題に興味を持ってくださることを願っております。
　もう四〇年以上前ですが私が勤めていたのがミッション系の女子中学高校の一貫校でした。中高生の中には当時、悪戯でたばこを吸う生徒がいました。保健室の先生の言葉が面白かったのですが「校則違反とか身体に悪いと言っても止めないけれど、将来妊娠

できなくなるよと言ったら子供たちは一発で止める」とおっしゃいました。今女性に妊娠云々と言うと問題になりますが当時は大丈夫でした（ 笑 ）。理念とか倫理とかで諭しても響かないのですが、自分の肉体に不利なことが起きると言われるとガツンと響くのだと思います。《安楽死》をしたら「後悔と苦しさのどん底に突き落とされる」という事が証明できると良いなと思ってしまいます。それはちょっと無理かなと思いますが‥。

ＴＢＳの放送を観て危機感を募らせているという報告

三月二四日

安藤先生
こんばんは。メールありがとうございました。
　先生に《安楽死》の講演依頼が多いという事はいよいよ《安楽死》が日本社会でも考えなくてはいけない時代になってきたのだと感じます。まさにＴＢＳは時代を感じてスイスのライフサークルでの医師の幇助自殺に飛びついたのではないのかと思いました。
　児玉さんのご著書によるとライフサークルは〈自殺ツーリスト〉を請け負う施設ですよね。パーキンソン病でも、まだ散歩もできる人をいとも簡単に自殺幇助してしまう乱暴な施設だと思いました。彼女は〈自殺〉でしたが、それを「自分で自分の死を決定して安楽死を遂げた女性」として報道していたＴＢＳ関係者の知識の浅さにビックリしました。ＮＨＫもそうでしたが、あれでは「難病患者で死にたい人を死なせるのが安楽死」と言うような誤解を植え付けてしまいます。《安楽死》の講演をなさるのは大変なことと思いますが、多くの人に正しく《安楽死》を理解してもらえるようご尽力お願い致します。
　さて、私はＴＢＳの放送を観て危機感を募らせてしまいまして、脳科学の先生に思い切ってまたメールを致しました。人が死んで逝くときに自分の脳内だけは操作されてはいけないのだろうと思いますので死に逝く脳内の最後に起こる現象の重要性について考えていかなくてはいけないと思ってお願いのメールをしてみました。人生最後の本人のスピリチャルなオリジナルな世界を薬によって阻害してよいのかという攻め方ができると思うのです。そして脳内を解明してみると、既存の主たる宗教の教えに終着していくことも分かると思うのです。
　では、この辺で。おやすみなさいませ。

フジテレビ系列で放送される『ザ・ノンフィクション』の案内

六月二日

安藤先生

　すっかりご無沙汰してしまいました。もう情報お受け取りかもしれませんが、これから（ 六月二日二時 ）フジテレビ系列で放送されるようです。

☝

安楽死選んだ女性 娘思い前夜に涙

＃ Yahoo ニュース

URL_PLACEHOLDER_１&preview=auto

番組を観てから先生に考えたことをと思っておりましたが、番組をお知らせしたほうが良いと思い至りました。もうご存知かとは思いましたが、取り急ぎ、番組始まる前にお知らせを書かせて頂きました。

フジテレビ系列で放送された『ザ・ノンフィクション』の感想

六月三日

安藤先生
おはようございます。
　昨日、連絡したフジテレビ系列の『ザ・ノンフィクション』を観まして、今回のスイスでの安楽死は、計画分娩と似ていると感じました。『ザ・ノンフィクション』を観る前は何故緩和ケアを飛び越えて《安楽死》を選ぶのかと疑問に思っていましたが、内容を観て死期の迫っていた彼女は死ぬ日を選びたかったのだなと思ったのです。計画分娩は臨月の妊婦さんの出産予定日前に出産日を決めてその日に出産促進剤を使って分娩することです。予め出産日を決めるので赤ちゃんを迎える家族も準備ができ夫が有給を取って立ち会うことも出来ます。出産に立ち会う医師も日中のお産になりシフトも組みやすく準備もし易いのです。
　今回安楽死したマユミさんが何故緩和ケアを選ばずにスイス迄行ったのかというのは、娘さんたちに自分が苦しんでいる姿や脳に転移してもし人格が変わってしまったりしたらそんな姿を見せたくないという理由が挙げられていましたが、彼女の心の奥底には娘さんたちの中学受験と大学受験の時期と自分の死期がバッティングしては困るという思いがあったからではと推察しました。彼女は一一月に安楽死を決めて実行していますが、中学受験も大学受験も二月に始まります。彼女が決心したのは脳の転移が分かった三週間後と言っていましたから決断が早かったのは、受験生に負担をかけない一一月がベストだと判断したのだと思いました。彼女は選択肢としてスイスとコンタクトは取っていたけれど、娘さんたちの受験まで大丈夫なら頑張る予定ではなかったのかと推察しました。ただ、受験の直前に具合が悪くなって娘さんたちが病室に待機することにでもなって最悪娘さんたちが受験できなくなったとしたら死んで逝く彼女には後悔が残るはずです。
　私も子供を育てていますから受験生をもつ母親の気持ちが分かります。特に中学受験の時の受験生の母親は必死です。中学受験に関しては今思うと異常なのですが、受験を無事に終わらせることに母親は心血を注ぎます。当時私の親たちは元気でしたが、もし、親が危篤になっても受験間近なら駆けつけないとまで密かに決めていたほどでした。そのくらい受験に心がまい進していました。彼女は安楽死せず緩和医療でも良かったのだと思うのですが、そうするといつ死が来るのか計算できません。死ぬ日を決められたなら受験生の娘さんたちの受験日に重なることは無いのです。精神的負担も極力かけずに済むのです。神戸大学理系を出たマユミさんはあらゆる情報を集めて一一月に安楽死する

ことが一番受験生に負担をかけないと判断したように思いました。今回は難病患者さんが苦しいから死なせてくれと懇願の末にスイスに行った小島ミナさんやＴＢＳがニュースで取り上げていたパーキンソン病だった女性とは違うケースでした。彼女は死期が迫っているという《安楽死》の要件を満たしていたのです。

もちろん私は安楽死には反対です。彼女が安楽に死ねたように見えて安楽に死ねているかどうかは分からないという思いは変わりません。そこをどう訴えていけばよいのか立ち止まりながら考えておりますが、この放送で死が免れない母親が死ぬ日を選びたかったという思いが推察できたので心が揺れました。私も「安楽死したら天国にいけない」と分かったとしても、受験生の子供を持っていて死が受験時期に被るかもしれないと思ったらマユミさんのように《安楽死》を選んでしまうと思います。母親は子供のためなら天国に行けなくてもいいのです。

出産促進剤ができて計画分娩ができるようになったように、彼女は計画死を選んで極力家族にかかる負担を回避したかったのだろうなぁと観終わって思いました。子供の受験を経験した母親として彼女が安楽死を選択した思いも分かりました。もし計画分娩のように死も死期が迫った人に限ってその日が選べるとしたら本人にとっても家族にとって都合が良いのです。この放送を観て、私は新たな難題を突き付けられた思いがしました。もう死が回避できないなら、死ぬ日を選びたい、その方が家族が集まれて家族にかかる負担が少ないと主張されたとき、どう反論できるのだろうと言う難題です。

ただ、これが許されてしまうと死期の迫った高齢者の周りでは、「この日は家族の都合が付くから死んでもらうのはこの日に決めましょう」とか「死ぬ日が決まったら有給取るね」と言うような会話が生まれる危険性がありますよね。計画分娩のように計画死が現代人にはとてもありがたい形態になっては困ると思いました。

まだ、まとまってはいませんが感想を送らせて頂きました。今、脳研究者の池谷裕二さんが脳科学を高校生に講義した内容をまとめた『夢をかなえるために脳はある』（講談社　二〇二四年三月）を読み終えたところです。今の脳研究の最新情報が分り易くまとめられています。ゲノム問題検討会議でもシリーズとして脳にＡＩを結合させる研究をされている脳科学者の先生の講演が続いていて七月にもあります。参加して脳科学の現代の研究状況を勉強させて頂きながら《死ぬときの脳内》についての質問もできたならと思っています。七月は児玉真美さんも登壇されるそうで楽しみに拝聴したいと思っています。

取り急ぎまとめたものですが送らせて頂きます。

ＴＢＳの二か月前の『安楽死の特集番組』の案内とスイスのライフサークルについて

六月一五日

安藤先生
こんばんは。
　こちらは暑い日が続いておりまして熱中症が心配な季節になっております。日本海側は猛暑のようですが、鳥取はいかがでしょうか？　　今日のネット配信で拾ったニュースですが、二か月前放送されたＴＢＳの『安楽死の特集番組』を観ました。
☝
　先生はご存知かもしれませんがＵＲＬです。
私は生きることを諦めた――“安楽死” を選択した男性、耐え難い激痛の日々　声をあげて泣く妹へ「強く生きて」（ TBS NEWS DIG Powered by ＪＮＮ ）
＃ Yahoo ニュース
URL_PLACEHOLDER_&preview=auto
　この記事でＴＢＳの番組のユーチュブにアクセスできます。交通事故に遭い身体が不自由で毎日激痛に苦しむフランス男性がスイスで安楽死を遂げる番組の特集かと思い観ましたら、後半で二〇二一年一月に安藤先生がご出演されたアメバプライムでの安楽死の特集で《安楽死》を望んでいて番組に出演していた二〇代の難病女性患者の〈くらけさん〉がスイスのライフサークルに行き安楽死を遂行するという映像が出てきてビックリしました。
　アメバプライムを観たとき成人しているのに親の庇護（ 介護 ）の下でしか生きられない彼女の切なさが分かって先生にもメールしました。（ メール内容は『生命倫理研究者に死に逝く意識を伝えた記録』の一三二ページ ）その彼女がスイスに向かったと知りビックリしました。〈くらけさん〉は本当に「安楽死を実行するのだ」とハラハラしながら番組を観ていました。
　《安楽死》を遂げるために〈くらけさん〉は毒を飲む方法をとったのですが、飲むと咽て吐き出したのです。吐き出した彼女は「一瞬で人生が走馬灯のように振り返り親に助けられて生きてきた自分を振り返ったら飲めなくなった」というようなことを泣きながら呟いで飲むことをやめました。「良かった」と心から思い、私が言いたいのはこれだと思いました。理性的に「死にたい」と考えて薬を投与される前に「これで死ねる」と意気揚々だったとしても、生きる力がある限り脳は生きようと死に抗いますから、薬を

飲んだ瞬間に「生きたい、死にたくない」と脳内の底から湧き上がってくるのです。このとき〈くらけさん〉は気付いていないのかもしれませんが、きっと、湧き上がってきた「生きたい、死にたくない」という《命》の声を受け取っていたと思うのです。その声は言語化されない《恐怖》や《拒絶》というものだったのかもしれませんが、〈くらんけさん〉の脳が本能的に死を拒否したのだと思います。

〈くらんけさん〉も死期が迫った患者さんではありません。ライフサークルは死期が迫っていない患者を受け入れている〈自殺幇助機関〉なのだとつくづく思いました。番組、ご存知かもしれないと思いましたが、私は今日知りましたので報告させていただきました。

アメバプライムのユーチュブの話

六月一八日

安藤先生
こんにちは。
　私の情報収集が大変遅く今アメバプライムのユーチュブに〈くらんけさん〉が安楽死を取りやめた後に出演した番組を観まして〈くらんけさん〉が安楽死を取りやめたのが、二〇二一年九月だったことが分かりました。その後に書かれた著書が『私の夢はスイスで安楽死』（ 二〇二二年一二月発売　彩図社 ）と知りまして、アマゾンで取り寄せました。
　今回見たユーチュブでは、『安楽死を遂げるまで』（ 小学館 ）の著者・宮下洋一さんも出ていらして「カトリックの国でも安楽死が容認されていること。キリスト教圏では自殺はしたくなくて安楽死と自殺は区別されている」というようなコメントをされていました。
　そのユーチュブを先生はすでにご覧になっていらっしゃるかもしれませんが先日お送りしたＵＲＬからＤＰＦをだして【映像】という文字の【報道特集】をクリックしていただくとＴＢＳの報道特集のユーチュブがでます。そのユーチュブの右横に沢山あるユーチュブの下にありました。
　先生に以前からお伝えしている死に至るまでの脳の二段階の作用についてまとめられないかと考えていますが、なかなか難しくて立ち止まったままでペンも進まず状態でおります。

六月二二日（ 日記 ）
　今日「安楽死をしたい」と主張している難病患者〈くらんけさん〉の『私の夢はスイスで安楽死』（ 彩図社　二〇二二年一二月二二日発売 ）が届いた。二時間ほどで読みおえて、〈くらんけさん〉に手紙を書き始めたが難しくて途中で添削の仕事をして頭を切り替えた。手紙が難しく明日改めて書くことにした。

六月二五日（ 日記 ）
〈くらんけさん〉の手紙を書き終えて、出版社宛てに出した。

『私の夢はスイスで安楽死』（ 彩図社 ）とその著者くらんけさんの話

六月二六日

安藤先生
こんにちは。
　こちらは、梅雨に入って気温と湿度が高くこの夏が思いやられます。鳥取も暑いことと思いますがお元気でお過ごしでしょうか。
　さて、先回お知らせした〈くらんけさん〉の著書『私の夢はスイスで安楽死』を読み終えまして〈くらんけさん〉宛てに昨日出版社の方へ手紙を出しました。
　『私の夢はスイスで安楽死』の内容は難病発病からの経緯説明と闘病中や就学中に多くの人から辛い思いをさせられたことが綴られていました。闘病も大変だったと思いますが、人間として扱ってもらえなかった哀しみが痛いほど伝わりました。京都で安楽死を願って決行したＡＬＳ患者の林さんと同じ動機で、お荷物として扱われることの悲しさ自立できない苦しさが安楽死を求めてしまうのだろうと推察しました。人間としての「権利」や「尊厳」をいつも、いつも打ち砕かれてしまう現実に〈死ぬ権利〉や〈尊厳〉を主張することで心のバランスが保てているようにも感じました。
　先生はご存知かもしれませんが、〈くらんけさん〉が大久保愉一被告と最初に知り合い、彼女が林さんに大久保愉一被告を繋げたのだそうです。〈くらんけさん〉がスイスで安楽死を認められたあとで、死を模索してスイスに行けない林さんが大久保愉一被告のツイートをみて連絡したそうです。大久保愉一被告が〈くらんけさん〉に林さんについて尋ねてきて、そこで二人を繋げたと記述されていました。〈くらんけさん〉自身はその後の二人のやり取りは知らず、事件はニュースで知ったそうです。ただ、大久保愉一被告のような医師は必要で大久保愉一被告を擁護するという事も書いてありました。「安楽死したい」思いが彼女を支え、その思いが揺るぎないことも分かりました。
　そんな彼女の心に食い込むことが出来るのかとても不安で手紙を書くのに多くのエネルギーが必要でしたが、それでも伝えなければと書きました。自殺願望のある方々の心は固くて難しいので言葉遣いを間違えると拒絶されてしまうとは思いましたが、こちらも勢いがなければ出せませんので本を読み終わった勢いのまま投函しました。出版社から無事〈くらんけさん〉の手元に届いてくれることを願っています。
　〈くらんけさん〉へは「安楽死は決して安楽に死ねないこと」をありったけの言葉でお伝えしました。私の精一杯の手紙です。お忙しいことと思います。体調にご留意のうえお過ごしくださいませ。

左記ご報告まで。

六月三〇日（ 日記 ）

〈くらんけさん〉に送る本『《死に逝く意識からの伝言》何故安楽死に反対するのかお話させてください』と『十代二十代三十代の死にたいなぁと思っているあなたへ‥《かたりべ》からの手紙』に添える手紙を書いていたが難しくて書けなかった。そこでグリーティングカードを添えて出すことにした。

電子書籍を配信しているパブ―のマイページを見たら、送った二冊のダウンロードが昨日から一回増えていた。もしかしたら、〈くらんけさん〉が読んでくれたのかもしれないと思った。

〈くらんけさん〉と《安楽死》

七月五日

安藤先生
おはようございます。
　お忙しい中メールありがとうございます。こちらも梅雨時なのに暑さが厳しく、年々厳しい気候になっていると感じております。
　さて、〈くらんけさん〉への手紙を六月二五日に出版社に出して、七月一日に拙著二冊『《死に逝く意識からの伝言》何故安楽死に反対するのか、お話させて下さい』と『十代二十代三十代の死にたいなぁと思っているあなたへ《かたりべからの手紙》』を出版社に送り転送依頼しました。これらの電子版はダウンロードされた場合カウントされ数字が分かります。〈くらんけさん〉に手紙が転送された頃に電子版の上記二冊がカウントされていましたので、どなたか読んで下さったようです。もしかしたら、〈くらんけさん〉が読んでくださっているかもしれないと思ったりしております。〈くらんけさん〉が、拙著を読んでくださったとしても、内容を理解していただくのにはかなりの時間がかかると思っています。
　「安楽死を訴えること」は〈くらんけさん〉の生きる意義にもなっていると思いますので、そこを覆すことは難しいことだとも思います。自殺（ 安楽死 ）願望の方々の心が頑なで開かないというのは感じていますが、スイスで薬剤を飲めなかった〈くらんけさん〉は、たぶん生命が持つ「死への恐怖」や「生きたいという突きあがる生存欲」をあの時に味わったのだと思うのです。ただ、〈くらんけさん〉は自分のその本心に蓋をして「自分が薬を飲めなかったのは、親を遺して死ねないという、日本人の家族観」と理解しようとしていると思うのです。薬を飲めなかったのは、ご自分に死ぬだけの決心や勇気や腹のくくりが弱かったという理屈で多分納得されていて、今でも自分は安楽死を望んでいると心から思っておられるのだろうと思います。〈くらんけさん〉が蓋をしている本心をこじ開けることは難しいのだろうと思いますが、時間をかけてでもこじ開けられると良いなぁと思っています。反応は頂けないのだろうとは思っていますが、日を空けて一度「安楽死」から離れて、〈くらんけさん〉というネームも捨てて自分に戻ってみて欲しいとお手紙を差し上げたいと思っています。
　多分自殺（ 安楽死 ）したい方に、死ぬ間際に「最大級の後悔と恐怖を味わう」と伝えてもそれでも「死にたい」と主張するのだろうと思うのです。その思いを止めるだけの説明が重要なのだろうと思っています。そこを何とかまとめられないかと考えている最中です。

七月一二日（ 日記 ）
　朝、お布団で〈くらんけさん〉に手紙を差し上げようと思った。

七月一六日（ 日記 ）
〈くらんけさん〉に手紙を書く。今回は『安楽死』とは関係のない内容にした。

七月一七日（ 日記 ）
　息子宅に向かう途中、駅前のポストに〈くらんけさん〉への手紙を投函した。

七月二一日（ 日記 ）
ゲノム問題検討会議で講演会。視聴した。
テーマ「ＢＭＩ（ ブレインマシンインターフェイス ）と命の重さ…技術は救世主になるのか」
『ＢＭＩ（ ブレインマシンインターフェイス ）の概要と具体例』
講師：四ノ宮成祥先生　（ 元防衛医科大学校長 ）
『コントロール幻想の時代の障害といのち』
講師：児玉真美さん　（ 一般社会法人日本ケアラー連盟代表理事 ）
『意識障害における自律概念の再考』
講師：戸田聡一郎先生（ 東北大学大学院文学研究科 総合人間学専攻哲学倫理学講座 哲学専攻分野 専門研究員 ）

〈ネットニュース「俺は生きている」脳死と判定された三六歳米男性、臓器摘出直前に目を開ける〉の案内

一〇月二六日

安藤先生
おはようございます。
　すっかりご無沙汰しております。気が付けば一〇月も終わろうとしておりますが、先生はお元気でお過ごしでしょうか？　　私は、コロナが五類になり今は息子宅の手伝いに週三，四日出掛けております。息子には三人の子供がいまして共働きで中堅になり両親の仕事が忙しくなったためでございます。私は、子供好きでして毎日小学生と幼児相手に楽しく後方支援に励んでおります。
　さて、〈くらんけさん〉には二度ほどお便りしましたが反応は頂けず、「安楽死を求めること」が生き甲斐であろう〈くらんけさん〉の心のバリアは固いと推察しております。あと一回くらいお手紙を差し上げたいと思っておりますが無駄かなと感じております。イギリスも「安楽死の是非を問う審議」がはじまったというニュースを見ていよいよイギリスも始まるのかなぁとため息をついておりましたが、二四日に朝鮮日報日本語版のニュースを見つけました。先生はもうご存知かもしれませんがＵＲＬ送らせていただきます。
「俺は生きている」　脳死と判定された三六歳米男性、臓器摘出直前に目を開ける　／米ケンタッキー州（ 朝鮮日報日本語版 ）
＃ Yahoo ニュース
URL_PLACEHOLDER_&preview=auto
　記事を読むと脳死判定の危うさと、生体反応があったとしても移植医たちは「よくある反射反応」として生きているかもしれないという疑いを持たない怖さを感じました。今までの脳死患者で「自分はまだ生きている」と思いながら麻酔をかけられ臓器を取り出された人が何人かいたのかもしれないと思うと本当にゾッとしてしまいます。もしそのとき意識が有ったら自分が「臓器移植を可」としたことを後悔するでしょうし、もし家族の承諾で移植されることになったら最後の最期で家族を恨むでしょうし、「私は、生きています、生きています」と叫びながら殺されてしまうという事になります。
　垣谷美雨という作家さんが、《高齢者（ 老人 ）になるほど「死にたくない」と言う》と書いていたのですが、高齢者は死が間近に感じるから「死にたくない」という命の本心が出て、若い人は死が間近ではないで観念として死を捉えて「死ぬのは怖くない」と言

いがちです。「死」が本当に自分の身に迫らないと命の声は聞こえてきませんから健康な状態で《死》を語ってはいけないと思いますが、そこが通じない歯痒さを感じてしまいます。今は、イギリスがどのような結論を出すのかが気になっているところです。

やっと暑さから解放されてまいりましたら、もう今年も二か月になってしまいますね。日々、ご自愛のうえお過ごしくださいませ。左記、記事のご紹介まで。

一一月二三日（ 日記 ）

今日のネットニュースで医師よる自殺幇助していたスイスの「ライフサークル」が新規受付は終了したとあった。「安楽死」できる国が広がってきたからという事らしい。しかし、まだ似た機関はスイスにある。

一二月一〇日（ 日記 ）

〈くらんけさん〉にクリスマスカードを出版社宛てに出す。犬がペットとのことだったので犬たちがパーティをしているカードにした。今は普通郵便到着に日にちがかかる。出版社の担当者にすぐ転送して頂けると二〇日過ぎに〈くらんけさん〉のところに着くと思う。上手く着いてくれることを願う。

第二部

諸先生への手紙とメール

日本尊厳死協会理事長様

二〇二三年
一一月八日（ 手紙 ）
日本尊厳死協会
理事長
　Ｋ・Ｙ先生
拝啓
　一一月とは思えない暖かさが続いておりますが、この手紙が読まれます頃は秋らしくなっている事かと存じます。初めまして、播磨澪と申します。長い間〈日本尊厳死協会〉にお手紙を書きたいと思っておりましたが躊躇しておりました。最近、やっと決心が固まりまして〈日本尊厳死協会〉のホームページを開きましたら、コロナ時代に見慣れたお顔のＫ・Ｙ先生のお写真が出てきまして、安心してお便りができると書き始めております。
　私は一九五三年生まれで普通の主婦でございますが、都内予備校で医系論文の添削講師を三〇年ほどしております。〈尊厳死・安楽死〉にはとても関心がございます。私の場合、母と叔母が終末期に人工透析を薦められましたがそれはせずに天寿を全うしております。とても穏やかに見送ることが出来ました。それは良かったと思っております。
　実は、〈尊厳死〉に関してどうしても気になることが二点ございます。それについて書かせていただきますので、宜しくお願い申し上げます。

《一点目》
　私の知識が少し古いのかもしれませんが〈日本尊厳死協会〉の尊厳死実行の骨子として死期が迫っていて回復の見込みがない状態の場合
１、延命治療の手控え
２、すでに装着した延命治療装置の取り外し
３、意識が無い状態（ 回復不能な遷延性意識障害 ）が続いたら生命維持装置の取り外しがあると思うのですが、３に関しての問題でございます。
　先生は、二〇一八年にでました『生存する意識』（ エドリアン・オーエン著・みすず書房 ）という書籍をご存知でしょうか？　　これは現代医学では意識が無いと診断されている患者さんと交信を試みたイギリスの神経学者さんの報告の記録です。読むとビックリするのですが、意識が無いと思われていた方たちに意識があったこととそうした閉じ込め症候群の方々の多くが〈安楽死〉（ 尊厳死 ）〉を望んでいないということでした。

『生存する意識』の二〇四ページに【閉じ込め症候群になってからの時間が長いほど、報告される幸福度も高かった！ もし脳損傷のあとに閉じ込め症候群になったら、それ以上生きたいとは思わないだろうと大多数の人が言い切るが、ローリーズのチームが調査した患者のうち、安楽死を望んでいることを表明した人はわずか７％だったので、最悪の事態に自分はどう思うだろうかという予想が誤っていることが伺える。じつは、閉じ込め症候群の患者の大半は、自分の生活の質にそこそこ満足していて、このような状態で実際に生きている人のあいだでは、死は最も人気のある選択肢ではないのだ】（『生存する意識』より ）という内容が記載されております。元気な時にそんな状態になったら死なせて欲しいと誰もが思うと思うのですが、実際には意識不明と診断されても本人たちには意識があって、全く死を望んではいないのです。

ですから、リビングウィルの３の事項が実行されるとして、『生存する意識』の患者さんの例で考えると、本人の中では意識があって死を望んでいないのに健康だったときの自分のリビングウィルに殺されてしまうという事が起こってしまいます。傍 (医師や家族) は本人には意識が無いと思っていますしリビングウィルもあるから、〈尊厳ある死〉で本人が望んだ素晴らしい死に方だったと思うことでしょう。しかし、実態は意識があって死にたくないと思っていて、「殺さないで、殺さないで」と叫けんでいる中で殺されていくのかもしれないのでございます。こうした残酷な殺され方が起こっているとしたらとても恐ろしいことであろうと思います。

〈尊厳ある自分の死〉を望むために書いた自分のリビングウィルでこんな残忍な殺され方をして良いのかという思いがございまして、これは〈日本尊厳死協会〉にお知らせすべきではないのかと思っておりました。実際になってみると、健康だった過去の自分の思いと全く異なるのでございます。《安楽死》を希望した７％の人は心が壊れたのだろうと思いますが、生きていてで意識がありますから心のケアをされると心を回復する余地がある方たちです。本当に意識が無いという診断が正しいと信じて良いのかを、考えていかなければいけないのではないのかと思うのでございます。この問題はまた後日詳しく書かせていただきたいと思っておりますが、この情報だけはどうしても〈日本尊厳死協会〉にお知らせしたと思っておりました。

《二点目》

《尊厳死》と高齢者の終末期医療の問題についてでございます。

二〇一八年の一一月一八日にＮＨＫスペシャル『人生１００年時代２』を観ました。そこでは高齢者の八〇歳九〇歳の透析が可能になり、透析治療をしていく中で認知症を発症する高齢者が続出している問題と、九〇歳以上の高齢者が緊急搬送され人工呼吸器をつけられ延命させられている現状が報告されていました。救命救急室ＥＲが高齢者超高齢者で埋まることもあるとのことでした。放送で分かったことは、超高齢者が若者や働き盛りの人たちと同じように救命治療を施されている現実でした。また、そうした救命医療を患者本人よりもその家族が望む様子も写しだされていました。九〇歳以上の高齢者が認知になり点滴の針を抜かないように縛られながら透析をしたり、人工呼吸器を老いた体につけられている様子は心痛むものでした。この番組を観たときから、超高齢者

終末期の医療の在り方を〈尊厳死の問題〉として考えてしまうことに問題があるのではと思っておりました。

日本の尊厳死協会などが訴えているのは自分の終末期に過度な治療を拒否して穏やかに死にたいから救命はしないでほしい、延命もしたくない。というものです。もうすぐ死ぬ命なのに、救急車で運ばれたら救命されてしまうからそれを避けたいという表明です。

『人はどう死ぬのか』（ 久坂部羊著・講談社現代新書 ）では「高齢者は穏やかに死にたいなら救急車を呼ぶな」というようなことが記されています。平穏死を推進されている長尾和宏医師が監修された映画『痛くない死に方』（ 主演　柄本佑・監督　高橋伴明 ）でも受け持ちの患者さんの家族に「救急車を呼ぶな」と言う場面が頻繁に出てきます。救急車を呼べば救命されてしまうからという理由です。『人はどう死ぬのか』によれば、人命第一主義の弊害であり、運ばれた以上医師は助ける義務があるからだと説明されています。過度な延命治療をしてしまうのは家族の意向もあり、家族の意向も無視できないという現状もあると記されてあります。そのために〈人生会議〉という提案がなされてしまうのですが、結局日本の「尊厳死を認めよ」の主張は、高齢者が過度な医療措置をされている様子が、不憫で尊厳ある姿ではないからそれを装着しない権利、取り外す権利が必要というものだと思うのです。しかし、これは、《尊厳死》の問題ではなく、今の日本の高齢者の終末期医療の方針に間違いがあるという事だと思うのでございます。

そこで、私は突拍子もない考えなのですが、救急で運ばれて来た高齢者の身体がもう終末期で救命しても無駄であるという事が簡単に分かるキッドなどがあると良いのだろうと思うのです。平均寿命を過ぎた高齢者に限定して、救命すべき命と救命できない命の区別さえつけば徒な延命はされなくなりますから、「死ぬ権利」を主張する必要が無くなります。家族も納得しますし高齢者も気軽に救急車を呼んで徒な救命はされず終末期を安心して迎えることが出来ます。こうした発想が必要なのではと二〇一八年から思っておりました。

今、医療研究は進んでおります。人体の研究は大変進んでいるようで、ＮＨＫが二〇一七年人体の不思議を放送した時点で臓器同士が生命維持に出し合う信号の分析ができていました。きっと、この物質が分泌されたら高齢者は死に向かっているという物質があるのだと思うのです。唾液などで、その物質が突き止められると良いのだろうと思います。こうした高齢者の終末期が分かるキッド開発という発想が必要なのではと思うのでございます。ただ、その研究を始めて結果が出るのには時間がかかると思います。そこでもう一つ考えられるのはＡＩの活用でございます。日本の医療界には高齢者の終末期の医療データが蓄積されていると思います。ＡＩに膨大な高齢者医療のデータを打ち込めば、様々な病気の高齢者の命の限界線が数値化されると思うのです。その数値を点数化するシートを作成して救急で運ばれた高齢者の命が、救命できる命と救命しても延命になる命のスクリーニングできると良いと思うのです。救命できない命は、終末期として穏やかに過ごす方向にするという形です。

若い人は生命力がありますから救命されなければなりません。救命第一が原則です。しかし、人は寿命がきたら死ぬのは摂理ですから、平均寿命年齢からとかそれに抵抗があれば九〇歳からとかあるいは明らかに終末期と思われる救急で運ばれた高齢者に限ってＡＩで数値化したもので判断すると救命しないことに家族も納得して受け入れると思

うのです。問題は《尊厳死》の是非ではなく高齢者の終末期医療の在り方なのだと思うのでございます。

人体の基礎研究もＡＩ技術も目を見張るほど進化しております。突拍子もないことなのかもしれませんが、高齢者の救命問題をこうした角度で考えていかないといけないのではと思うのでございます。こうしたことを国に働き掛けるような運動を〈日本尊厳死協会〉のような大きな団体にお願いできないものかと考えております。高齢化が進む日本において、高齢者の終末期をどう平穏に迎えるかは日本の医療が突き当たっている大きな問題であろうと思います。これは、突拍子もない提案になりますでしょうか。ご検討していただき〈日本尊厳死協会〉に動いていただけると有難く存じます。

以上、長い間お知らせしなくてはと思っておりました『生存する意識』の情報と、高齢者の終末期医療の在り方についての提案を書かせていただきました。どうぞ、ご検討くださいませ。『生存する意識』は是非お読みくださいますようお願い申し上げます。

コロナ中は先生の発信される情報を毎日拝見しておりました。これからもくれぐれもご愛の上、ご活躍くださいませ。

Ｅテレ１００ｄｅ名著『ローティ“偶然性、アイロニー、連帯“』（２／５）指南役様

二月九日（電子メール）
Ｅテレ１００ｄｅ名著『ローティ“偶然性、アイロニー、連帯“』（２／５）指南役
大阪大学社会技術共創研究センター
招聘准教授
Ｃ・Ｈさま
拝啓
　突然、メールを差し上げるご無礼お許しくださいませ。二月五日、ＮＨＫＥテレ１００ｄｅ名著『ローティ“偶然性、アイロニー、連帯“』を視聴致しまして、先生のご説明が分かり易く、またとても新鮮で感動してメールを差し上げてしまいました。私は長年東京都内予備校で医系論文の添削講師をしています播磨澪と申します。先生のご専門の分野とは違いますが現代医療の《安楽死・尊厳死》の問題に取り組んでおりまして、「従来の哲学が《安楽死・尊厳死》の問題を分からなくさせていて、従来の哲学を越えて（外れて）考えていかなければ人類は《命》を見誤るのではないのか」と思っておりました。丁度それをまとめました物を電子書籍で公開したばかりですので厚顔ながらＵＲＬでご紹介させていただきます。無料配信です。（紙本は２月２６日発売予定）
《生命倫理研究者に死に逝く意識を伝えた記録》→ https://puboo.jp/book/135613
　「普通の人たちの会話を遮断する哲学」から「多様な会話を聞く哲学」への移行が必要と言うのはとても重要な視点と感じました。《死》を考察するときの従来の哲学的視点が本当の問題点を分からくさせていると思っておりまして、《命の声》を聴き取らずに理念で切り捨てる危険性を感じております。先生と分野が違うのかもしれませんが、もしお時間がありましたら拙著を開いてお読みいただけたなら幸いです。普通の人間の感覚が分かって頂けるかと存じます。
　重ね重ね突然差し上げたメールのご無礼をご容赦願いまして、この辺で失礼させていただきます。時節柄、ご自愛のうえご活躍くださいませ。次回の放送も楽しみにしております。

二月二〇日（電子メール）
Ｃ・Ｈさま
こんにちは。

先日メールさせていただいた播磨澪でございます。昨日の１００ｄｅ名著３回目を視聴しまして、是非先生に読んで頂きたいと思い、また厚顔にもメールを差し上げてしまいました。実は私も「言葉の誘導で虐殺が起こる」という考察をしておりました。私の場合は《安楽死》を起点に考えておりますが、「自分の死を自分で決める」「死ぬ権利」「自己責任」という素晴らしい表現によって肯定されていく《安楽死》は「自己虐殺」であると思っております。それについてまとめましたのが、

『〈死に逝く意識からの伝言〉何故安楽死に反対のか、お話しさせて下さい』
電子書籍（ 無料配信 ）https://puboo.jp/book/135019
Amazon 購入サイト [https://www.amazon.co.jp/dp/4815025789?tag=myisbn-22]
になります。

電子版は無料配信しておりますので、クリックしていただけると直ぐ読めます。第二部の第二章に「表現の持つ怖さ」としてまとめてあります。私は稀有な《死に際体験》を４回ほどしていまして、がん告知も受けた経験があります。その経験を踏まえますと「自分の死を自分で決める」や「死ぬ権利」を主張して生きる力のある命を無理に遮断させるとしたら、本人にとって大変悲惨なことになるという事が分かります。まさに「自己虐殺」なのです。これに関しては、上記拙著に詳しく書いてあります。６５ページほどの薄い本ですのでお読みいただけますと私の主張もご理解頂けると思います。

西側ヨーロッパ諸国では「安楽死容認」に舵を切ろうとしています。私は、ヨーロッパ諸国の哲学者たちは何をしているのだと思っておりました。哲学は所詮形而上学的探究で終わる学問なのだなと少しがっかりもしていました。日本の哲学者もはっきりと《安楽死》問題に声を上げません。そんな中、先生の昨日の説明を伺い希望を感じました。哲学でも「血肉ある生命」について論じて頂けるのだと期待がもてました。哲学で、「安楽死推進」の論理の欠陥に踏み込んでいただけたなら嬉しいと思っております。

どうしてもメールを差し上げたいという思いが止まらず、何度も厚かましいメールを差し上げておりますことご容赦くださいませ。

ＮＨＫ『クローズアップ現代』（ ２／６ ）のゲスト様

二月二六日（ 手紙 ）
ＮＨＫ『クローズアップ現代』（ ２／６ ）のゲスト
慶応義塾大学医学部医療政策管理学教室
教授
Ｍ・Ｈ先生
拝啓

向春の候、Ｍ・Ｈ先生におかれましてはご健勝のこととお慶び申し上げます。初めまして、播磨澪と申します。都内の予備校で三〇年以上医系論文（ 医学部で出題される小論文の模試 ）の添削講師をしておりまして、個人的に《尊厳死・安楽死》について考えております。二月六日のＮＨＫクローズアップ現代を視聴いたしまして、先生がＡＩのデータ解析を医療の分野に生かされていると知りお手紙を書かせて頂きました。

日本では、高齢者が救急で運ばれて救命治療を受けた後回復が見込めずただの延命になっているから、その延命装置を外すためにも《尊厳死法》を成立させるべきという議論が行われています。現実の病院のＥＲが高齢者で満杯になっているというテレビ報道も見ました。私は、これは《尊厳死》の問題ではなく、高齢者の終末期医療の在り方の問題であろうと思うのでございます。

巷では「高齢者は具合が悪くなっても救急車で運ばれたら延命させられるから救急車は呼ばない方がいい」と言われています。『人はどう死ぬのか』（ 久坂部羊著　講談社新書 ）はお医者様が書かれた本ですが、この中で人命第一主義の弊害であり、運ばれた以上医師は助ける義務があるからだと説明されています。また、動転した家族が治療を望むため病院は救命せざるを得ないと言うのです。

これは《尊厳死》の問題ではなく高齢者の終末期医療の不備が原因で、高齢者の終末期の在り方の確立を考えるべきではないのでしょうか。ただ、終末期をどこで線引きするのかが難しく、結局救命せざるを得ないのが現状です。そして、救命してみたものの単なる延命状態になってしまい《尊厳死法》を通して人工呼吸器を外そうという事なのですが、そうすると人工装置で維持されている若い命の切り捨てに派生する危険性があります。また、老齢で肉体が死なんとするときに延命治療することも残酷です。「生きて欲しい」という家族の思いが優先されると、末期で死に逝かんとする高齢者の《命》の扱いも間違ってしまうのではないのかと懸念いたします。

突拍子もない考えなのですが、救急で運ばれて来た高齢者の身体がもう終末期で救命しても無駄であるという事が簡単に分かるキッドなどがあると良いと思うのでございます。高齢者の場合、救命すべき命と救命できない命の区別さえつけば徒な延命はされな

くなりますから、「死ぬ権利」を主張する必要が無くなります。延命にしかならない命は、ゆっくり命を閉じる終末期医療を受けるようにすると良いのだと思います。家族も納得しますし、高齢者も気軽に救急車を呼んで徒な救命はされず終末期を安心して迎えることが出来ます。こうした発想が必要なのではと思っております。

例えば、この物質が分泌されたら高齢者は死に向かっているという物質があるのだと思うのです。ただ、その研究を始めて結果を待つには時間がかかると思います。そこでもう一つ考えられるのはＡＩの活用です。日本の医療界には高齢者の終末期の医療データが蓄積されていると思います。ＡＩに膨大な高齢者医療のデータを打ち込めば、様々な病気の高齢者の命の限界線が数値化されると思うのです。例えば、その数値を点数化するシートを作成して、救急で運ばれた超高齢者の命が、救命できる命と救命しても延命になる命かのスクリーニングできると良いのだと思うのです。こうしたＡＩの活用で、日本の救急で運ばれる高齢者医療のあり方を是正すべきではないのかと考えております。こうした発想での医療現場でのＡＩ活用は考えていただけないものかとお手紙を書かせて頂きました。

高齢で死に逝かんとする命を延命装置でつなぎ止め、それが悲惨だからと《尊厳死法》を考える発想はおかしいと思うのです。突拍子の無い発想かもしれませんが、現場で活用できると徒な高齢書の延命問題の解決になるのではないのかと思います。高齢者が終末期を穏やかに迎えられるためにも、提案内容を研究対象としてご検討いただけましたならとお手紙を書かせて頂きました。

実は私は「死に際体験」を四、五回ほどしています。その経験を箇条書きにしてみますと

１、一四歳の時、大学病院でがん告知を受ける（ 手術の結果がんは誤診で別の病気と分かる ）。

２、一六歳の時、交通事故に遭い国道を 21 メートル飛ばされ、一週間意識不明になる。

３、二八歳の時、妊娠三か月で、出血性大腸炎になり母子とも命が危険と言われる。

４、三二歳の時、海水浴中に沖に流される。

５、四八歳の時、食物アレルギーでアナフィラキシー・ショックを起こし脳死寸前になる。

となります。これらの経験から「安楽死を容認してはいけない」と強く思っております。それを分かって頂きたくて、生命倫理を研究されている鳥取大学医学部の安藤泰至准教授にメールを差し上げていました。今回その内容を『生命倫理研究者に死に逝く意識を伝えた記録』として書籍にまとめてみました。別便でお送りいたします。何故「安楽死に反対するのか」を理解してほしくてまとめたものでございますが、そのなかで〈高齢者医療の終末期〉についても考察しております。付箋を貼ってお送りいたします。お読みいただくと私の主張が分かって頂けると思います。

電子版もあります。電子版は無料配信になっております。ＵＲＬを下記でお知らせいたします（ ＵＲＬ省略 ）。開くと直ぐお読みいただけます。

突然の手紙、ご容赦願いましてこの辺で失礼致します。季節柄どうぞご自愛の上ご活

躍くださいませ。

京都哲学研究所共同代表理事様

三月四日（ 手紙 ）（ プラトンの『パイドン』とソクラテスが遺した言葉について ）
京都哲学研究所
共同代表理事
Ｄ・Ｙさま
拝啓

向春の候、Ｄ・Ｙさまにおかれましてはご健勝のこととお慶び申し上げます。初めまして播磨澪と申します。新聞で「ＡＩ時代における哲学の創造に取り組む『京都哲学研究所』の創設シンポジューム」が開催されたという記事を読みまして是非お手紙を書きたいと思い書かせていただいております。突然お手紙を差し上げますこと、ご容赦くださいませ。

私は、東京都内の予備校で医系論文の添削講師を三〇年以上しておりますが、基本は家庭生活を主軸に子育て介護をしてまいりました。ただ、私には稀有な体験がございまして「死に際」を四・五回体験しております。そのため「死の考察」に関する「哲学」に大変不満をもっておりました。イェール大学のシェリー・ケーガン教授の『死とは何か』（ 文響社 ）などは「死に際」を経験した者には的外れの度が過ぎるとさえ思いました。

仕事柄「脳死・尊厳死・安楽死」の勉強はしておりまして、深く関心を寄せて考え続けておりましたが、哲学がこれら先端医療で生じて来た「死…脳死・尊厳死・安楽死」という新しい死の問題に向きあえていないのではないのかと思っておりました。そこにＡＩが台頭してきて知識や概念形成においても人間を凌駕しはじめております。「死」の概念が揺ぎＡＩの台頭が顕著になりつつある今、哲学に頑張って頂かないといけない時代と思っております。しかし、やはり従来の哲学に対しては不満がございます。

何が不満か、詳しくお伝えするのが難しいのでございますが、「脳死・尊厳死・安楽死」に関しまして鳥取大学医学部の安藤泰至准教授にメールを差し上げておりました。その五年分の記録を今回書籍にいたしました。その中に、従来の哲学への不満やＡＩ問題についてまとめた箇所がございます。

今回、書籍に付箋をつけた箇所や全体をお読み頂けますとご理解頂けるのではと思いまして、勝手ながら別便で送らせていただきたく存じます。ご笑納いただきましてご一読いただけますと嬉しい限りでございます。突然の申し出で本当に申し訳ございません。しかし、どうしてもどうしてもＡＩ台頭時代に、哲学者の先生にお手紙を差し上げたいという思いが止まらず書かせて頂きました。

私は平凡な主婦でして哲学に関しては先生からご覧になりますと無知と思われる立場におりますが、哲学入門などで読みました中でソクラテスの遺した言葉が一番「死」を物語ってくれていると思いました。ソクラテスの遺した言葉から紐解く「死について」を哲学の先生に一度お伝えしたいと思っておりましたので、それを少し書かせていただきます。

まず、私の「死に際」体験からお伝えいたします。

１、一四（ 三 ）歳、大学病院でがん告知を受ける（ 手術後は誤診で別の病気と分かる ）
２、一六歳、交通事故に遭い国道を二一メートル飛ばされ、一週間意識不明になる
３、二八歳、妊娠三か月のとき、出血性大腸炎になり母子とも命が危険と言われる
４、三二歳、海水浴中に沖に流される
５、四八歳、食物アレルギーでアナフィラキシー・ショックを起こし脳死寸前になる

と５種類の方向から「自分の死」を経験致しました。この経験で分かった事は、「死」へのアプローチが違えば脳内で起こることが違うという事でございました。しかし、五種類をそれぞれの方向から「死」と対峙して分かったことは、「命は絶対に生きることを諦めない」という事でございました。

こうした経験をしますと、「死」を考えるときに「生物学」としての視点を失ってはいけないという事も分かります。「哲学」も「死」を考察するときに「生物学」としての視点を失ってしまったら、ＡＩの「死の理論」「死の概念」に平伏す形で終わるのではないのかと感じておりまして、それが人類にとって一番危険なことであろうと懸念しております。これについて論じると長くなりますので、今回はソクラテスの遺した言葉に限って書かせていただきます。

前置きが長くなりましたが、本題に移らせて頂きます。私が死線ギリギリまで行ったのは一六歳の交通事故に遭った時だったのですが、プラトンが遺したソクラテスの死ぬ間際の言葉と様子が、私がトラックにはねられて「自分の死」に向かっていた状況と酷似していて驚きました。プラトンが書き記した『パイドン』の記述です。「死に逝く意識」を正確に伝えてくれたクリトンと、書き遺してくれたプラトンに私は感激致しました。

『パイドン』のソクラテスの最後の言葉『「クリトンよ」とあの方は呼びかけました、「アスクピオスに、われわれは鶏１羽の借りがある。どうか忘れず、お返すように。」（ 一一七Ｅ-一一八Ａ ）』

ここを、多くの哲学者は、さすがソクラテス、死に逝かんとする時も理性をもって取り乱すことなく死んで逝ったという評価をされているのではないのかと思うのですが、あれは死んで逝く人の脳内を正確に伝えたものでソクラテスだけが特別ではありません。脳内は肉体の置かれた状況で変わってくるのですが、実際に死に際を体験した人が死んで逝くときの脳内はプラトンの遺してくれたソクラテスの様子が一番的確に書かれているのです。

人間が不慮の事故などで元気だった身体が死に向かうとき脳内は冷静で、日常と変わらない思考をしています。決してソクラテスが優れて卓越し人格だったから冷静だったのではないのでございます。何を言っているのだと混乱されておられるかもしれませんが、自分が死ぬと言うことはどういうことなのかを理解していくことが大事で、人は生物として死んで逝きます。その視点で「死」を考えない限り「死」の観念論から抜けら

れず、現代医療がもたらした「死の定義の揺れ（ 新しい死 ）」に哲学は答えを出せずに終わるのではないのかと懸念いたします。

拙著の〈ＡＩとソクラテスと死〉の段を読んで頂かないとソクラテスと死に関してはご理解頂けませんので、「ソクラテスの死の解説」としてまとめたものを拙著に挟んで送らせて頂きます。是非、拙著を開いて読んで頂ければ幸いに存じます。

突然の手紙で訳の分からないことを書いていると思われるかと存じますが、お送りいたします拙著を開いていただき、「自分が死んで逝くこと」を体験した者の言葉に耳を傾けていただけましたなら幸いでございます。

季節柄、ご自愛の上、ご活躍くださいませ。突然のご無礼を何卒ご容赦願いまして失礼申し上げます。

拙著『生命倫理研究者に死に逝く意識を伝えた記録』に挟んだ手紙

Ｄ・Ｙ先生

前略

実は、この四三ページの３《死に逝かんとする人のこころと宗教や哲学の齟齬》と４《安藤先生と佐藤優さんの会話から》の間に以下の「ソクラテスの死の解説」が安藤先生に差し上げたメールには入っていました。この内容を入れると全体が混乱すると思い編集時に割愛したのですが、哲学者の先生方には「ソクラテスが遺した言葉と死」の紐解きをどうしてもお伝えしたいと思いました。拙著をお読みいただくとこの段の前後の文脈が分かると存じます。

私がお伝えしたいのは、人間が不慮の事故などで元気だった身体が死に向かうときはプラトンが書き残した『パイドン』のソクラテスのような状況にいます。決してソクラテスが優れて卓越した人格だったから平静なのではなく、プラトンが正しく「死に逝く意識」を書き遺してくれているという事でございます。私も瀕死の状況を体験しておりまして、その時の脳内はソクラテスと同じでした。同じようなことを言っているのです。ソクラテスの様子の記述は、「死に逝く意識」を説明するときの脳内の証言としてとても信頼性があるものでございます。

ソクラテスの死の解説（ ３と４のあいだに入る ）

がん告知は人間に取りましては外敵の襲来ですから「死への恐怖」は大変なものになります。ところが、慢性病で命を閉じようするときや交通事故（ 私は一六歳で遭遇 ）のように死を意識できていないときの死に際の脳は違った反応や思考をしています。脳内は全く死を想定せず、このあと（ 未来 ）すべきことを考えているのです。脳の基本は生きるように稼働していますから日常の思考を止めません。つまり明日を想定して思考は続けられています。傍から見て死にそうであと少しで死ぬと思われる人でも「一人称の脳内」は、今すべきこと明日すべきことを考えています。自分が死ぬかもしれないと

思ってもその日常の思考を脳は止めないのです。

私はプラトンが書いたという『パイドン』のソクラテスの最後の言葉『「クリトンよ」とあの方は呼びかけました、「アスクピオスに、われわれは鶏１羽の借りがある。どうか忘れず、お返すように。」（一一七Ｅ-一一八Ａ）』を読みまして、ソクラテスの死ぬときの頭の中の様子が手に取るように分かりました。ソクラテスは毒薬を飲んだのでもう自分は死ぬなと予想していたはずです。予想しているのですが意識があるときは「自分が死ぬ」とは脳の根本では思っていないのです。そして脳内では日常の思考をしているのです。だから、「アスクピオスに、われわれは鶏１羽の借りがある。どうか忘れず、お返すように。」と日常の会話をしているのだと思うのです。

拙著（『一人称の死　自分が死ぬその瞬間』幻冬舎）を読んでいただくと分かるのですが、私は高二の登校時に交通事故に遭い二一メートル飛ばされ国道に叩きつけられて瀕死の状況で横たわっていました。ところがその日は友達から借りた本を返すことになっていましたので、瀕死の状況の中で私が叫んでいたのは「本、本」という言葉だったそうです。返さなくてはいけない本を失くしてはいけないというのが瀕死の状態の中で真っ先に頭に浮かんでいたことの様でした。拙著にも書いてありますが、体は瀕死の状態でも頭の中は日常と断絶していなかったのです。ソクラテスの最後の言葉を知り、借りたものはどうしても返したいという思いは人間には強くあるのだなと、ソクラテスと私の反応が同じだったことに驚きました。ですから、ソクラテス最後の言葉を知り私は震える思いがしたと同時にソクラテスがその会話のあとどのような脳内状態であったのかという予測がつきました。

ソクラテスは最後まで自分は死ぬとは思わずに命を閉じたはずです。ソクラテスは毒をあおりましたが自殺ではありません。ですから生命としての死に逝くときの化学物質である脳内ホルモンが正しく分泌されて命を閉じたと思います。その一瞬に生物がもつ神秘を味わったはずで肉体が最後に放つ神秘性に気が付いただろうと思うのですが、もうその時は臨死で外部に知らせることが出来ない状況だったので、そこをソクラテスは知らせてくれなかったのです。たぶん毒をあおったとき一瞬恐怖を感じていたはずです。意識がある間もしかしたら「死の恐怖」は有ったのかもしれません。ソクラテスはそれを伝えることを理性が止めたのだろうと推察します。（以上）

私は、ソクラテスはもしかしたら見栄っ張りで意地っ張りだったのではと想像しております。彼は服毒でしたので脳内では「死の恐怖」がよぎっていたのだろうと思いますが、それは哲学者として口にはしなかったのだろうと推察いたします。それを伝えてくれなかったのがソクラテスのソクラテスたる所以なのかもしれないと思います。

ソクラテスが遺した言葉と死

実際の「死」を語ろうとするとき、理解していただくのは難しいのですが、拙著四一ページにあるソクラテスの言葉がとても示唆的です。

ソクラテスが「死を恐れるということは、いいですか、諸君、知恵がないのにあると思っていることにほかならないのです。なぜなら、それは知らない事を、知っていると思うことだからです。なぜなら、死を知っている者は誰もいないからです。ひょっとす

ると、それはまた、人間にとって、いっさいの善いもののうちの最大のものかもしれないのですが、しかし彼らは、それを怖れているのです。（ 二九ａ-ｂ ）」と言ったとあります。この一文に対して私は「死を怖がる」という人間の本能からでる感性に目を向けずに、ソクラテスは肉体と切り離す思考こそが尊いという立ち位置で、肉体の声を聞かないなかで「死」を定義しています。ソクラテスは人類の頭脳の代表でそこから生まれた哲学の流れは人類の歴史に不可欠です。ただ、「死」に関してソクラテスは生物的感性（ 一人称の感性 ）を外してしまっているのでＡＩ的です。と書きました。

ソクラテスは肉体の声を聴かないのでＡＩ的と言うのは間違いではなく、生物の生存欲という本能を排して考える「死」はとても危険であろうと思います。特に現代医療の発達で「死」の境界線が揺らいでいるときに生物的な《恐怖》を抜きに考えてはいけないと強く思っております。ただし、脳が自分の死を受け入れた最後の一瞬に脳は多分幸福を感じる物質を放出するのです。それはソクラテス時代も古代からの言い伝えとして伝わっていて、死に際を経験してきた先人の言い伝えとして「死んだら、幸福感を味わえる」と言われてきていたのだろうと思います。原始宗教であろうと思いますが、ソクラテスはその伝承を受けいれて「それはまた、人間にとって、いっさいの善いもののうちの最大のものかもしれない」と推測しています。これは実際の「死」に関して正しい示唆なのです。

『死ぬ瞬間』を記したエリザベス・キューブラ・ロスがこの後スピリチャルな世界があるとして肉体を脱したら天国があるという展開を『「死に瞬間」と死後の生』に書いています。日本では救命救急センターに勤めていた医師の矢作直樹氏が『人は死なない』という著作でスピリチュアルな霊の世界が死後にあると言う展開をされているのですが、それがスピリチュアルな話ではなくて、脳内の働きで起こる現象だと推察します。これは現段階で、すでに証明されていています。脳は死ぬ前後にセロトニン等の快楽や安定をもたらすホルモンが放出されると証明されているのでございます。それは幸福体験となり臨死体験した人たちが話す内容になります。多分脳は最期にそうした幸福感をもたらすホルモンを出す仕組みになっているのだと思います。これを今科学が解明しつつあります。こうして科学で解明されていくと「死」に対して「哲学」がそれを踏まえて考察されなければいけないのだろうと思うのでございます。私は、科学が発達した現代にソクラテスは、「死」に関して最も先駆的言葉を遺していると感じております。そのことを哲学者の先生にはお伝えしたかったのでございます。

これをお読みになって大変混乱されると存じますが、科学が発達して来た現代において時代に対応するべく、哲学には従来の壁を飛び越えて欲しいと願わずはいられません。ただ、死んだら幸福感が味わえるから死んでも良いという結論づけがとても危険です。この時「哲学」はどう考察していくべきなのかを考えていかなければいけないのだろうと感じております。

「死ぬときの脳内」について考察した拙著がございます。『命とは何か、死とは何か』という薄い冊子にまとめました。無料配信しております。生物学的脳科学的な知識がありませんので用語等の間違いはあるかもしれませんが「死へのアプローチ」が違えば、脳

内はどう違うのかを整理してまとめたものになります。
『命とは何か　死とは何か』（ 無料配信 ）　https://puboo.jp/book/135689

おわりに

『生命倫理研究者に死に逝く意識を伝えた記録』に続き、この『生命倫理研究者に〈死と脳の作用について〉伝えた記録』もまとめられました。〈死に逝く意識〉や〈死と脳の作用について〉は体験した者でなければ分からない事で、それを説明するのはとても難しく理解されにくいと思っています。しかし、お伝えしなければ人類は《命》の扱いを間違ってしまうという危機感がありました。こうしてなんとかまとめられたのは、安藤先生にメールを差し上げるという形態だったからと思っています。私との対話を続けて下さった安藤先生には深く深く感謝申し上げます。

第二部の京都哲学研究所共同代表理事の哲学者さまへの手紙は、私の思いが先走り過ぎてうまく書けていなかったのですが、ソクラテスは《死》に関して大きな示唆ある言葉を遺していて、ソクラテスの時代にもいわゆる臨死体験が伝えられていたのだと推察できます。この臨死体験こそが《安楽死反対》を唱える柱の一つになります。臨死体験をした人たちはあまりそのことを人に語りたがらないそうで、それは眉唾物の話として誰にも信用されないからのようです。これらの話はどうしてもスピリチュアルな問題として科学から切り離されて考えられます。しかし死ぬ間際の〈脳の作用〉として考えると分かりやすくなります。死ぬ間際に起こっている〈脳の作用〉を知ったら《安楽死》は決して安楽な死ではないと分かります。また、この〈脳の作用〉の解明は既存の宗教のコアな教えと対立しません。「命を全うしたら天国にいける（ と思いながら命を閉じる ）」のは真実だと証明してくれるはずです。人類の教えとして《命》は全うされなければならず、故意の《死》を作り出してはいけないのだろうと思います。ですから宗教家の方々には揺れることなく信念をもって《安楽死反対》を貫いていただきたいと思っています。

私の電子書籍は当座無料配信しております。お知り合いと共有（ 転送 ）していただいて構いません。広くお伝えいただけると有難い限りです。これも電子版で配信いたします。題名で検索していただくと出てくると思いますのでご利用下さい。また、この出版社は、他社出版が可能です。もし大きな出版社で出していただけるようでしたら可能ですので、どなたかご紹介いただけましたら幸いです。

ここまでお読みいただきまして本当にありがとうございました。

二〇二四年一二月吉日

参考資料・文献

『海を飛ぶ夢』映画ＤＶＤ・書籍（ 翔年社 ）
『死ぬ瞬間と死後の生』（ キューブラー・ロス　著・中公文庫 ）
ＮＨＫスペシャル『臨死体験　立花隆思索ドキュメント　死ぬとき心はどうなるのか』（ 二〇一四年放送 ）
『哲学入門　死ぬのは僕らだ』（ 門脇健著　角川ＳＳＣ新書 ）
読売新聞（ 二〇二三年一二月二九日 ）
『生存する意識』（ エイドリアン・オーエン著　みすず書房 ）
ＮＨＫスペシャル「シリーズ人体『神秘の巨大ネットワーク』」（ 二〇一七年九月放送 ）
『生命倫理研究者に死に逝く意識を伝えた記録』（ 播磨澪著　デザインエッグ社 ）
ＴＢＳ『報道特集・安楽死特集』のユーチュブ（ 放送日不明 ）
『ザ・ノンフィクション』（ 二〇二四年六月二日放送　フジテレビ ）
『夢をかなえるために脳はある』（ 池谷裕二著　講談社 ）
アメバプライムの安楽死に関しての討論のユーチュブ（ 放送日不明 ）
『私の夢はスイスで安楽死』（ くらんけ著　彩図社 ）
「俺は生きている」脳死と判定された三六歳米男性、臓器摘出直前に目を開ける（ ネットニュース ）
『人はどう死ぬのか』（ 久坂部羊著・講談社現代新書 ）
映画『痛くない死に方』（ 監督　高橋伴明 ）
ＮＨＫスペシャル『人生１００年時代２』（ 二〇一八年の一一月一八日放送 ）
１００ｄｅ名著『ローティ “偶然性 アイロニー連帯 “』（ ＮＨＫＥテレ二〇二四年二月放送 ）
クローズアップ現代（ ＮＨＫ　二０二四年二月六日放送 ）
『死とは何か』（ シェリー・ケーガン著　文響社 ）
『安楽死で死なせてください』（ 橋田壽賀子著　文藝春秋社 ）
『安楽死が合法の国で起こっていること』（ 児玉真美著　ちくま新書 ）
『宗教と生命』（ 池上彰 佐藤優 松岡正剛 安藤泰至 出川宏対談 角川書店 ）
『人は死なない』（ 矢作直樹著　バジリコ ）

著者・著書

著者
播磨　澪 (はりま　みお)
一九五三年、北海道生まれ　元中学高校国語科講師　都内予備校医系論文添削講師

著書
『一人称の死・・自分が死ぬその瞬間』(幻冬舎)
『最後の一息まで、あなたとして息をして・・末期がんのあなたへ』(デザインエッグ・ネット無料配信中)
『《死にゆく意識からの伝言》何故「安楽死」に反対するのか、お話させてください』(同右・ネット無料配信中)
『十代二十代三十代の「死にたいなぁ」と思っているあなたへ』(同右・ネット無料配信中)
『命とは何か、死とは何か…〖五種類の死に際体験〗報告と考察』(壱) (同右・ネット無料配信中)
『生命倫理研究者に死に逝く意識を伝えた記録』(同右・ネット無料配信中)

※ネット無料配信の拙著は、書名をそのまま入れて検索し「パブ―」の箇所をクリックとすると出てきます。

生命倫理研究者に〈死と脳の作用について〉伝えた記録

著　　播磨澪

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社